

照 丘 遺 跡 III
TERUOKA SITE III

1993.8

長野県飯山市教育委員会

照 丘 遺 跡 III
TERUOKA SITE III

1993.8

長野県飯山市教育委員会



遺跡遠景（戸狩スキー場ゲレンデより）1991. 6



調査地全景（南より）



SI 4 柱穴群と語り合う調査員



照丘高校生体験学習—ジョレンの使い方を指導する作業員



S11 遺物分布状態

上下逆に出土した底のない甕
(J8-P1)



一人黙々と仕事をする作業員(S16)



弥生時代の土器・石器

序

飯山市教育委員会

教育長 岩 崎 彌

飯山市は長野県の北部に位置し、山紫水明で優れた自然環境に恵まれています。また、古く輝かしい歴史をもち、その歴史の背景のなかで育まれてきた数多くの文化財も残されています。これら美しい自然も価値の高い文化財も、ひとしく私達飯山市民の祖先が残してくれた貴重な遺産であります。これら貴重な遺産を知ることは、ふるさとを知ることであり、さらにふるさと飯山のたぐいなき良さを知ることであります。また、そうした先人の歴史を学ぶことは、過去をみつめなおし未来を考えるための礎になるものです。

一方で、祖先が残してくれた貴重な文化財が破壊され、失われることは誠に残念なことであります。これらを大切に保存して後世に伝えることは、現在に生きる私達の責務でもあります。

照丘遺跡は古くからその存在が知られており、学会においても注目されている遺跡であります。平成3年、遺跡地内にプール・小体育館が建設されることになり、照丘高等学校より依頼を受けて記録保存のための緊急発掘調査を実施しました。調査団長の高橋桂先生をはじめ、調査員各位、作業員の方々など多くの市民の皆さんの御協力を得て実施し、初期の目的を達成することができました。

本報告書が広く市民の皆様方に読まれ、私達祖先の生活を偲ぶとともに、地域の将来を考える資料として活用されることを念願いたします。

平成4年3月20日

例 言

- 1 本書は、長野県飯山市大字照星^{いっせい}2066番地ほかに所在する照丘^{てらおか}遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査は、県立飯山照丘高等学校のプール・小体育館建設に伴って、同校の依頼を受けた飯山市教育委員会が平成3年4月30日より同年6月5日まで発掘を実施し、整理作業は同年12月より実施した。
- 3 照丘遺跡は、過去において調査報告がなされている(高橋桂「飯山市照丘遺跡出土の弥生式遺物について」1962・飯山照丘高等学校「飯山照丘高等学校敷地内発掘調査報告」1978)ので、今回の調査報告を照丘遺跡Ⅲとして報告するものである。
- 4 今回の調査で発見された主な遺構・遺物は以下のとおりである。
弥生時代中期後半から後期初頭の竪穴住居址6軒・同掘立柱建物址4棟ほか
弥生時代中期・後期土器・石器・土製品
- 5 発掘調査は、飯山市教育委員会が下記に掲げる調査会を組織して実施した。

飯山市遺跡調査会(平成3年度)

顧問	小山邦武	飯山市長
会長	佐藤春夫	市教育委員会委員長
副会長	長谷川元一	市社会教育委員長
委員	滝沢藤三郎	市文化財保護審議会会長
	丸山豊雄	市議会総務文教委員長
	中村敏	市公民館長
	高橋桂	日本考古学協会会員
	山崎美都枝	市教育委員会委員長職務代理者(平成3年10月7日退任)
	福沢裕文	市教育委員会委員長職務代理者(平成3年10月8日就任)
	岩崎彌	市教育委員会教育長
事務局長	佐藤清	市教育委員会教育次長
事務局次長	渡辺博	市教育委員会社会教育係長
事務局員	望月静雄	市教育委員会社会教育係
	樋口二二子	

調査団

団長	高橋桂	飯山北高等学校教諭
担当者	望月静雄	
調査主任	常盤井智行	
調査員	田村況城	
	桃井伊都子	
	小林新治	

作業参加者

大森信衛・竹内大五郎・北條辰男・石沢悦次・小林経雄・樋山巖・上原みつ枝(以上戸狩)、山崎満枝(大深)、吉田忠彦(其綿)、八井沢房江(神戸)、稲場宏(上町)、飯山照丘高等学校3年生(引率 寺沢教諭)。

整理参加者

小林みさを（柏尾）、北山けさえ（市ノ口）。

6 本書の作成は、調査主任常盤井および調査員桃井が主体となり、田村・望月が補佐した。現場写真は各調査員が、遺物写真は田村の撮影による。なお、執筆は分担して行い団長高橋が統括した。文責は目次に明記した。

7 本書で使用した方位は、磁北である。

8 発掘調査から報告書作成に至るまで、下記の諸氏・諸機関からご指導・御協力を賜った。記して感謝申し上げる。（順不同・敬称略）

百瀬長秀（県文化課）・田中克己（光明寺住職）・寺井一男・常盤井和正（明徳寺住職）・飯山照丘高等学校・飯山市森林組合

目 次

巻頭図版 1・2・3・4

序

例 言

第1章 調査経過	1
1 調査に至る経過	望月 1
2 調査経過	桃井 2
A 発掘調査	2
B 調査日誌抄	2
第2章 遺跡の位置と環境	5
1 地理的環境	田村 5
2 歴史的環境	常盤井 8
第3章 遺跡の概要	常盤井 11
1 遺跡の概要と過去の調査	11
2 照里古墳群	18
3 調査方法	20
4 層 序	21
第4章 弥生時代の遺構と遺物	25
1 遺 構	25
A 竪穴住居址	常盤井 25
B 掘立柱建物	桃井 31
C その他	桃井 33
2 遺 物	35
A 土 器	常盤井 35
B 石 器	望月 41
C 土製品	桃井 44
第5章 その他の遺構と遺物	桃井 47
1 おとし穴	47
2 溝状土坑	47
3 その他の土坑	49
第6章 結 語	高橋 51

挿 図 目 次

図1 飯山盆地とその周辺の地形区分	5	図4 調査地周辺の遺跡	9
図2 遺跡の位置	6	図5 照丘遺跡と照里古墳群	12
図3 1987(昭和62)年飯山盆地における積雪量の差	7	図6 昭和36(1961)年の調査	14

図7 昭和42(1976)年の調査	15	図17 竪穴住居址 SI 6	30
図8 昭和52(1977)年の調査1	16	図18 掘立柱建物 SB1~SB4	32
図9 昭和52(1977)年の調査2	17	図19 J 8 P 1	33
図10 照里8号墳測量図	18	図20 弥生時代の土器1	42
図11 調査地周辺の地形	19	図21 弥生時代の土器2	43
図12 調査地全体図1	22	図22 弥生時代の石器	45
図13 調査地全体図2	23	図23 紡錘車	46
図13 竪穴住居址 SI 1~SI 3	26	図24 溝状土坑	48
図15 SI 1 遺物分布図	27	図25 土坑実測図	49
図16 竪穴住居址 SI 4・SI 5	28	図26 SK 3 出土遺物	50

表 目 次

表1 竪穴住居跡・掘立柱建物柱穴一覽表	33	表3 出土石器・石製品計測表	46
表2 弥生土器編年の対比	41		

PLATE 目 次

PL 1 遺跡遠景 遺跡全景	PL 9 SI 5 完掘状態 SI 5 P1 土器出土状態
PL 2 発掘に先立ち樹木の伐採 重機による表土除去 表土除去後の調査地	PL 10 SI 6 上面調査風景 SI 6 遺構検出状態 SI 6 柱穴群
PL 3 I 区調査風景 II 区調査風景	PL 11 SI 6 中のSK 21 SB 1 SB 2
PL 4 II 区完掘状態 III 区完掘状態	PL 12 SB 2-P1 土器出土状態 SB 3 J 8-P1 土器出土状態
PL 5 調査開始式 SI 1 遺構上面 SI 1 調査風景	PL 13 SK 1 調査風景 SK 1 調査風景 SK 1 完掘状態
PL 6 SI 1 遺物分布状態 SI 1 遺物取り上げ準備 SI 1 帯部分の遺物状況	PL 14 SK 8 SK 9 SK 13
PL 7 SI 1 土器出土状態 SI 1 紡錘車出土状態 SI 1 完掘状態	PL 15 SK 14 SK 15 SK 3 銭貨・鉄製品出土状態
PL 8 SI 2 調査風景 SI 2 完掘状態 SI 3 完掘状態	PL 16 SK 3 SK 5
PL 9 SI 4 完掘状態	

PL 16 KL-12柱穴群

PL 17 M-9 柱穴群

KL-10・11 柱穴群

平板測量風景

PL 18 弥生時代の土器

PL 19 弥生時代の土器

PL 20 弥生時代の土器

PL 21 弥生時代の石器

PL 22 紡錘車

江戸時代の銭貨・鉄製品

第1章 調査経過

1 調査に至る経過

長野県立飯山照丘高校の前身は、昭和23年県立下水内郡高等女学校が、新制高等学校に昇格して長野県下水内郡飯山南高等学校と改称して定時制課程を設置したことに始まる。外様・太田・永田・常盤・豊井の各分校が設置されたが、昭和36年には常盤・外様・太田分校が統合されて、照里地籍に照丘分校が設置された。この後改築や造成に伴って多くの工事が実施されるとともに、昭和49年には南高から独立して長野県飯山照丘高校となった。さらに、昭和53年からは新校舎の建設が開始され、照里地籍の景観も一変することとなった。

この学校敷地内に埋蔵文化財が存在することは古くから知られていたが、学術的に論じられたのは、昭和36年に統合分校に伴う工事によって出土した遺物を報告した高橋桂氏が最初であった。また、昭和52年には新校舎建設に伴って照丘高校による発掘調査が実施されている。こうした一連の工事などにより、敷地内の遺跡は大半がほぼ壊滅したと考えられている。

平成2年になって、県教育委員文化課および照丘高校よりプール・小体育館建設に伴う埋蔵文化財包蔵地についての照会が口頭で寄せられた。以下にその経緯の概要を記すことにする。

平成2年12月17日、県文化課百瀬指導主事・照丘高校手塚校長・同大蔵事務長・市文化財審議委員高橋桂氏および市教育委員会事務局職員で現地協議を実施した。その結果、学校整備の一環として破壊を受けてきた場所であるものの、原地形は大きく変化していないため建物以外の場所では埋蔵文化財が残されている可能性が大きいと判断された。

同年12月20日付けで、県教育委員会教育長より『校舎改築に係る照丘遺跡(飯山市)の保護について』の通知があった。保護措置としては記録保存とし、発掘調査を実施する。必要経費は事業者負担とする。発掘調査は市教育委員会に委託とするなどが示され、計画書並びに予算書が提示された。

平成3年4月3日付けで、飯山照丘高等学校手塚六夫校長名で発掘調査の依頼があった。これに対して4月12日付けで、教育長名で受託する事とし、発掘調査の計画書を提出した。同16日付けで飯山市長と照丘高等学校長の間で契約書を取り交わした。

4月18日、飯山市遺跡調査会調査団の委嘱と会議を開催した。団長に飯山北高等学校教諭の高橋桂氏、調査主任に常盤井智行・小林新治両氏(照丘遺跡は主任に常盤井)、調査員に田村況城・桃井伊都子両氏、



現地協議 H2・12・17

総括担当として教育委員会事務局の望月があたることとなった。また、照丘高等学校の窓口として、事務長の藤沢次夫氏・事務担当の滝沢俊一氏に担当いただいた。

2 調査と整理

A 発掘調査

今回発掘対象となった遺跡は、照丘遺跡である。発掘総面積は約 800㎡、調査期間は 4 月末から 5 月末までの約 1 か月間を予定した。そして、弥生時代中・後期の竪穴住居跡の発見等の成果をもっておよそ予定どおりに発掘調査を終了した。

今回の調査にあたっては旧校舎造成等で遺跡が壊されているかも知れないとの懸念があったが、攪乱部が多い割には調査地全域にわたり遺構を検出することができた。しかし遺物の出土は造成による攪乱のため遺構が多い割に少なかった。

なお発掘期間中 2 日間にわたり照丘高校寺沢教諭引率による 3 学年生徒の発掘体験学習も行われた。

以下発掘調査の概要を示す。

所在地 飯山市大字照里字長峰 2066

調査期日 1991(平成3)年 4 月 30 日～同年 6 月 5 日

調査面積 800㎡

調査結果 縄文時代：溝状土坑 9・おとし穴 1

弥生時代：竪穴住居跡 6・掘立柱建物 4・ほか 土器・石器・土製品

江戸時代：土塚墓 1・鉄器・銭貨

整理作業は 12 月より、旧第三中学校寄宿舎で行った。整理手順は遺物洗浄・図面整理・遺物ネーミング・接合・実測・トレース・写真撮影であるが、洗浄・ネーミングについては主として作業員の方々にお願いした。

B 調査日誌抄

1991(平成3)年

4 月 18 日(木) 森林組合による調査地の樹木伐採(～23日)。

4 月 23 日(火) 照丘遺跡発掘調査の日程・地点確認等について照丘高校と打ち合わせ。発掘調査前の地形測量。発掘器材の点検、作業員の募集等の発掘準備を行う(～25日)。

4 月 25 日(木) 仰信濃測量による周辺地形測量(～26日)。コンテナハウス設置。

4 月 26 日(金) 器材搬入。重機による表土除去。

4 月 30 日(火) 照丘遺跡発掘調査開始式を現地で行う。引き続き調査地の地区割杭打ち・ジョレンかけ精



深い穴の発掘

査等の作業を開始する。トレンチ内を便宜的にⅠ～Ⅳ区に呼び分けることとする。

5月1日(水) Ⅰ区ジョレンかけ精査。部分的に置土の厚いところをスコップで除去する。調査地略図作成。

5月2日(木) Ⅱ区J～L-10～12区ジョレンかけ精査を行う。午後雨のため現地作業中止。

5月7日(火)～8日(水) Ⅰ区遺構掘り下げへと移行。Ⅱ区検出の竪穴住居址(S11)より弥生時代の土器等がまとまって出土。溝状土坑も確認される。照丘高校長視察(7日)。地元向けの発掘だより『かわら版照丘』を発行、関係者・見学者に配布する(8日)。

5月9日(木) 雨のため現地作業中止。

5月10日(金)～11日(土) Ⅰ区SⅠ1遺物分布状態写真撮影・実測・土層観察等の精査を行う(～16日)。同区遺構掘り下げ完了による全体写真撮影。Ⅱ区Ⅰ～K-7～8区ジョレンかけ精査へと移行。照丘高校事務局滝沢氏他3名・第三中学校教諭1名見学(10日)。

5月13日(月)～14日(火) J～K-6～9区ジョレンかけ精査・遺構掘り下げ続行。J～K-9～10区にまたがり円形に位置する柱穴群を確認。J-8区のピットより石鏝出土。

5月15日(水) 同上区遺構掘り下げ続行。照丘高校長視察。照丘高校寺沢教諭と生徒の発掘体験学習について打合せを行う。

5月16日(木)～20日(月) J～1-7～10区ジョレンかけ精査・遺構掘り下げ。J-8区のピットより甕1個体倒立して出土。Ⅰ区平板測量開始。照丘高校長・事務局滝沢氏他2名見学(16日)。17日・20日両日にわたり照丘高校3学年生徒による発掘体験学習を行う(引率 寺沢教諭)。作業員の方々の手ほどきによるジョレンかけ精査・遺構掘り下げの体験、常盤井主任による遺跡の説明と見学を併せて行う。

5月21日(火) J～L-9～10区遺構掘り下げ。Ⅰ区平板測量完了。

5月22日(水) J～L-9～10区遺構掘り下げは完了、M-9～10区ジョレンかけ精査へ。少雨のためか土が固く難行する。

5月23日(木) M～N-9～10区ジョレンかけ精査・遺構掘り下げ。Ⅱ区東部ミニバックによる調査地



発掘風景



測量風景

拡張。東へ向かって地山が急激に落ち込んでいることがわかる。

5月24日(金) K-M-10-12区ジョレンかけ精査・遺構掘り下げ続行。K-11区で竪穴住居址の一部が確認される(SI5)。

5月27日(月)~28日(火) 同上区ジョレンかけ精査・遺構掘り下げ終了によりII区精査ほぼ完了。掘立柱建物4棟確認。SI5内ピットから壺胴部半分出土する。

5月29日(水) II区全体写真撮影。III・IV区ジョレンかけ精査開始。IV区で円形竪穴住居址が確認される(SI6)。画区遺構掘り下げへと移行する。照丘高校長視察。

5月30日(木)~31日(金) II区平板測量開始。同区南端部ミニバックによるトレンチ拡張。III・IV区遺構掘り下げ完了による全体写真撮影。発掘器材撤出。PM4:00~教育委員会・照丘高校職員現地見学会。PM4:30~埋文センターにて発掘終了式を行う(31日)。「かわら版照丘」No.2発行(31日)。

6月3日(月)~4日(火) III・IV区平板測量・遺物とり上げ。

6月5日(水) III・IV区平板測量・遺物とり上げ作業に併行して発掘器材の撤収を行いますすべての現地作業を終了する。照丘高校長視察。



調査参加者

第2章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

照丘遺跡は長峰丘陵の北端部、飯山市大字照里字長峰2066番地ほかに所在する。遺跡は西の外様平、東の常盤平の低湿地に挟まれ、外様平から流れ来る広井川と、北部から流れ来る今井川が千曲川に合流する地点にある。日本一の大河千曲川が、長野県に残す最後の盆地が飯山盆地である。この飯山盆地は西に關田山地、東は東部山地、南は高社火山に囲まれた盆状の低地である。盆地は南の運から北の太田までの、南北の長さおよそ15km、東西の幅は最も広いところでおよそ6kmである。長野県内の盆地の中では小さい盆地の一つである。この盆地内にはいくつかの丘陵と平坦地が発達し、中央部を千曲川が北に流れている。

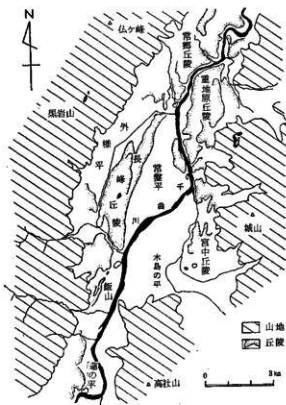


図1 飯山盆地とその周辺の地形区分

長峰丘陵は飯山盆地の中央部をほぼ南北に走る丘陵である。飯山市街地北の有尾から戸狩にかけて細長く分布し、南北およそ7km、東西の幅は最も広いところで1.2kmであり、標高は最高値416mである。盆地底からの比高で約100mである。丘陵の東麓線は極めて直線的に延び、丘陵の斜面も急傾斜を示している。これに対して、西側は比較的曲線的であり、斜面も緩い傾斜を見せている。丘陵の北端は戸狩地籍で消滅する。外様平は、南は柳原藤ノ木から始まり、北の太田地区曾根にかけて、南北約9km、幅約1.5kmの細長い低地である。盆地西側の山沿いには、小規模な扇状地が連続しており、南から皿川扇状地、笹川扇状地、滝沢川扇状地などが隣接し合って、複合扇状地を形成している。南部の藤ノ木や南条での標高は約315mで、比較的起伏に富んでおり、扇状地の発達と合わせて小規模な丘陵地形が認められる。これに対し、北部の小泉や戸狩では平坦となり、その標高は約315mで、戸狩の最も低いところでは312mとなっている。これより北へ行くと標高は次第に増して曾根では450mとなる。中央部の滝沢川扇状地は、西部山地黒岩山に源を発して中条地区を流れ下る滝沢川はそこで藤ノ木から北流してきた広井川と合流してさらに北へ流れ、尾崎・小泉沖を流れて戸狩地籍で、長峰丘陵の消滅するのを待っていたかのように、その先をかすめて、千曲川に合流する。また、北部では今井川が南に流れて同じく戸狩で千曲川に合流する。

常盤平は、長峰丘陵と千曲川とに挟まれた平坦地であり、千曲川の氾濫堆積物によって形成された沖積平野である。常盤平の西縁は長峰丘陵の東縁と一致し、ここを国道117号線が走っている。長峰丘陵の南端から北端までがその長さであり、千曲川に挟まれたこの低湿地は、常に千曲川の水害を受けてきた地域である。千曲川の左岸沿いの小沼から柳新田にかけての地域は、周りより数メートル僅かに高く、自然堤防と

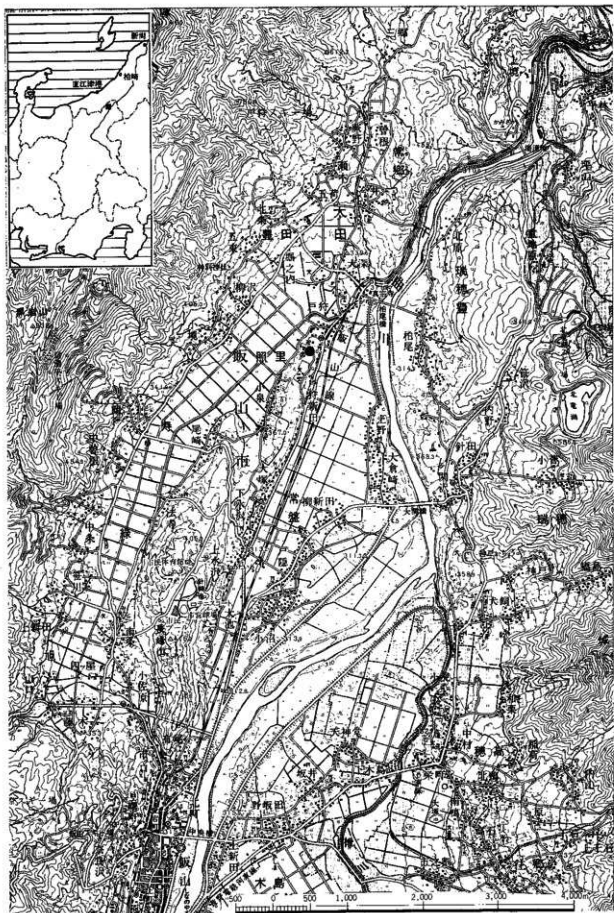


図2 遺跡の位置 1:50,000

なっている。また、北東部に^{おがくみ}あたる大倉崎から^{うの}上野にかけての地域は、平らに比べて7～9m程標高が高く自然堤防ではない。この常盤平も戸狩地籍で狭まり消滅する。

以上述べたように飯山盆地は、南から北にかけて緩やかな傾斜をもって下り、北部の戸狩地区において一番低くなっており、外様平と常盤平に挟まれた長峰丘陵も戸狩において消滅する。飯山盆地をゆっくりと蛇行しながら流れ下った千曲川も、戸狩以北からは狭窄地帯に入る。湯滝、西大滝からは急流となって流下し、新潟県に入り信濃川と名を改め日本海に流れ込んでいる。

飯山地方の気候は、夏型と冬型の二面性を指摘することができる。夏の気候は内陸盆地型であり、夏の日盛りには高温となり、4月～9月までは比較的雨が少なく乾燥する。特に4、5月は雪消えと同じに、著しく乾燥する時期であり、しばしばフェーン現象が起こり、火災発生の時期でもある。また冬の気候は一口に言えば裏日本型である。冬が訪れると、大陸は急に冷却して厳しい寒さとなる。東アジアの中でもシベリアを中心として非常に寒冷な気団が発生し、それが暖かい太平洋方面に向かって流れ出してくる。これが冬の季節風で、一般には北西風となる。この季節風は元来乾燥した大陸の内部から吹いてくるのであるから、水分が乏しいわけであるが、途中日本海上を吹き抜けてくる間に、多量の水蒸気を供給され、日本に上陸して、山脈によって上昇されて冷やされ、裏日本に雨や雪を降らせるようになる。飯山盆地の西側に聳える関田山脈は高さ1000m内外の浅い山なので、裏日本に吹きつける季節風が充分上昇しないでこの山地を越えて吹き下ろすので、飯山地方には湿度の高い雪が降り、深雪地帯となる。飯山地方の積雪量を言い表す言葉に、「一里一尺」という言葉がある。これはJR飯山線を南から北へ向かって一里進むと、一尺積雪が多くなることを意味している言葉である。東西的にはこの差が一段と強く、飯山盆地を東から西に半里進むと一尺積雪が多くなる。屋根の雪下ろしを例にとってみると、戸狩地区では3回であるのに、北西の方角の小境や顔戸では4回雪下ろしを言う具合である。このように冬の積雪量は、狭い飯山盆地の中でもかなりの差がある。雪が多い飯山であるが、雪が多いということは、雪が断熱材の働きをして、雪の下に埋もれている動植物にとっては、暖かく冬を越せると言う事もある。飯山市の市花であるユキツバキなどはその代表的なものである。

参考引用文献

『外様村史』飯山市公民館外様支館 1957

『飯山市誌 自然環境編』飯山市・飯山市誌編纂委員会 1991

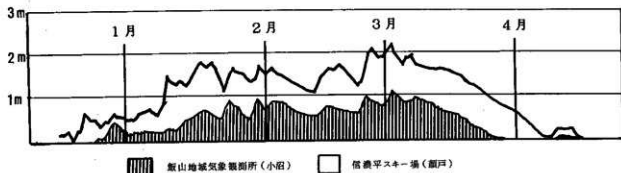


図3 1987(昭和62)年 飯山盆地における積雪量の差

2 歴史的環境

旧石器時代 飯山市は旧石器時代遺跡の宝庫である。特に瑞穂地区の千曲川段丘面上には太子林・関沢・日焼等の遺跡が十数か所密集し、県内ひいては全国的にも有数の旧石器時代遺跡群を形成している。これらの遺跡は標高によって様相が異なる傾向を示す。すなわち海拔350mの等高線より上ではナイフ形石器を持つ遺跡が顕著であり、それ以下では尖頭器を持つ遺跡が顕著であるという傾向である。照丘遺跡のある長峰丘陵でも大塚・尾崎南・針湖池・長峰・小泉などの旧石器の遺跡があるが、標高350m以上で、ナイフ形石器が採集されており対岸の瑞穂地区と同じ傾向がうかがえる。

縄文時代 飯山市内の草創期の遺跡で代表的なのは小佐原遺跡である。昭和44(1969)年に発掘され表裏縄文土器が多量に出土した。近年再びこの遺跡が研究者の間で注目されている。長峰上では針湖池でやはり表裏縄文土器が採集されている。また上野遺跡でも有矢尖頭器が出土している。

早期は押型土器が岡山上段・北竜湖・十三ヶ丘などで出土しているが、大規模な遺跡はない。

前期になると集落が発達する。有尾遺跡は有尾式土器の標式遺跡である。大倉崎遺跡も丘頂を囲むように竪穴住居址が7軒発見されており、諸磯系の土器が多量に出土している。真宗寺裏では有尾式土器が採集されており、岡峰遺跡では小形の竪穴住居址が2軒確認され、ループ土器等が出土している。

中期は八ヶ岳山麓が縄文文化の中心地となり縄文農耕すら予想されているが、北信においては中期の遺跡は顕著ではない。秋津深沢遺跡が多量の土偶を出土した遺跡として有名である。上野遺跡で少量の中期土器が出土している。

後・晩期の遺跡も多くはない。代表的なのは宮中遺跡で、後期の石棺状遺構が多数検出されている。顔戸南木ノ下遺跡では後期の鉢が出土している。

弥生時代 長峰丘陵と外様平の西縁扇状地は弥生時代遺跡の密集地である。今わかっているだけでも40か所を越える遺跡がある。中期は中野市栗林遺跡を標式とする栗林式土器が出土しており、後期は長野市箱清水遺跡を標式とする箱清水式土器を出土し、当地が北信地方一体の土器文化圏に含まれていることがわかる。代表的な遺跡として小泉遺跡がある。工場団地造成に伴う昭和63(1988)年



照里1号墳



照里8号墳



- 1 柳沢A(縄・古) 2 柳沢B(弥) 3 鶴屋敷(弥) 4 桜沢(平) 5 小境(弥・平) 6 押出(弥・古) 7 願戸館(中)
 8 願戸第5(縄) 9 願戸大天狗(弥) 10 北木ノ下(弥) 11 願戸南木ノ下(縄・弥) 12 願戸道下(縄)
 13 釜淵(縄・弥) 14 布施田神社(平) 15 笹川(縄) 16 真宗寺裏(先・縄・弥・平) 17 岡峰(縄・弥・平)
 18 旧照丘小学校(弥) 19 光明寺前(弥) 20 照丘(弥・古) 21 照里古墳群 22 茶臼山古墳群 23 大塚(先・弥・平・中・近)
 24 大塚古墳群 25 尾崎館(中) 26 小泉(弥) 27 柳町(弥・古) 28 山崎(弥) 29 尾崎南(先・弥・平)
 30 東長峰(弥) 31 西長峰(弥) 32 下林(弥) 33 法寺(弥) 34 水沢(弥) 35 下水沢(平) 36 針尾池(先・縄・弥・平)
 37 北原(縄・弥・平) 38 東懸寺(先・平) 39 お茶屋(縄・弥) 40 大池古墳群 41 上野II(平)
 42 上野(先・縄・弥・平) 43 大倉崎館(中) 44 上野古墳 45 大倉崎(先・縄)

図4 調査地周辺の遺跡 1:25,000

～平成3(1991)年にわたる発掘調査で百棟を超える住居址が検出され、碧玉製玉類を出土する組み合わせ式木棺墓が多数検出されている。弥生時代の稲作が冬期の多雪を障害としていなかったことをよく物語っている。

古墳時代 古墳時代の集落跡は発見例が少ない。の中で柳町遺跡^{やなぎまち}は前期の遺跡として貴重である。竪穴住居址が検出され、北陸地方と強い類似性のある土器が出土している。上野遺跡でも前期の竪穴住居址と方形周溝墓が検出され、竪穴住居の構造・出土土器ともに北陸地方に強い類似性をもつ。古墳は長峰丘陵上に点々と存在する。かつては20基以上を数えたが、今は当遺跡東北の照里8号墳をはじめ8基が確認できる。大塚茶臼山古墳は直径30mを越える市内最大の円墳である。また第三中学校建設造成時に直径25mの古墳周溝跡が検出され調査されており、和泉式期の高杯などが出土している。長峰丘陵上では今のところ確実に横穴式石室をもつ古墳はない。

照里8号墳は今回測量調査を実施した。その結果直径ないし一辺が18mを測る円墳ないし方墳であり、高さ2.8mを測ることが判明した。

平安時代 古墳時代後期横穴式石室墳がないことは前述したが、それに続く飛鳥・奈良時代の遺跡も今のところ発見されていない。再びこの地に開発の銀が入るのは平安時代になってからである。実年代でいえば9世紀後半から10世紀にかけて当地に多くの「農村」が開拓されたことが、外様平を中心とする当該期の遺跡によって推察することができる。代表的な遺跡として北原・鍛冶田遺跡^{きたはら がつて}を中心とする旭町遺跡群^{あさひまち}があげられる。北原遺跡では鍛冶遺構が多く検出され、農業に欠かせない鉄製品を生産していたことが知られる。また北隣の岡峰遺跡でも竪穴住居址が検出されている。

中世 中世は現在の集落が成立しはじめた時代であり、また争乱の時代でもあって、関田山脈東麓の峰峰^{みねのね}に点々と山城が築かれた時代でもある。代表的な遺跡としてこれら山城のほかに釜淵遺跡^{かまぶち}などがある。釜淵遺跡では全国的にも珍しい鳥形木製品をはじめ、永仁4年(1296)銘の木簡、能登半島で焼かれた珠洲焼などが出土している。今後山城などの調査が進めば、文献もとばしい中世常磐^{とよひら}の牧の具体的様相もしいに明らかになってゆくにちがいない。

参考引用文献

「村史ときわ」常盤村史刊行委員会 1968

「飯山の遺跡」飯山市教育委員会 1986

第3章 遺跡の概要

1 遺跡の概要と過去の調査

照丘遺跡は長崎丘陵の北端、飯山市立第三中学校敷地内と長野県飯山照丘高等学校敷地内に存在する遺跡の総称である。遺跡の主體的年代は弥生時代と古墳時代である。北接して光明寺前遺跡があるが照丘遺跡と内容が等しく両者は一連の遺跡と考えられる。

現在遺跡地は両校造成工事によって大きく改変されているが、その工事に伴って、時には造成工事のブルドーザーが動く中で発掘調査が行われている。

昭和37(1962)年の調査 昭和36年4月1日をもって飯山南高校定時制分校が統合されることとなり、その位置が現在の照丘高校の地に決定、昭和35年より校舎建設工事が始まった。

翌37年4月より第2次工事としてグランド整地工事が始まった。その時、同年4月より同校に赴任した高橋桂が弥生時代の遺物が出土しているのを発見、飯山北高校地歴部や飯山南高校郷土研究クラブの応援をうけてブルドーザーによる作業の暇をみて遺物の採集につとめた。出土遺物には土器と共に木製品3点(図6)があった。

木製品はB地点から出土し、弥生時代中期の土器と共存している。1は長さ31cm、幅9cm、厚さ2~2.5cmの長方形木器で、長径の両端が斧状工具で削られており一端は軸状にやや尖る。表面はノミ状工具による整形痕が残る。材はナラの板目材である。2は現存幅11cm(推定12cm)、向長47cm、厚さ4~4.5cmの板材で、一端は方形のくり込みがある。材はクリである。3は現存長115cm、幅10cm、厚さ8.5cmの角材で一端が「L」字形に切り込まれている。材はナラである。2・3は建築用材と考えられる。

8月には第3次工事として工業科校舎敷地の整地作業が行われたが、それに先だって夏季休暇中の三日間ではあったが、消滅してゆく遺跡の一端でも確認しようと、神田五六、桐原健両氏と、高橋桂が中心となり、飯山北・南両高校の地歴部・郷土研究クラブ員の応援のもとA地点に試掘溝を設けて調査するとともに4月以来採集された遺物の整理を行った。

A・B両地点から出土した土器は弥生時代中期後半のもので、栗林式でも後出の様相をもつものである。石器はB地点から石槌や、擦り切り手法で製作されたいわゆる栗林式磨製石斧と呼ばれている片刃の小型磨製石斧などが4点出土している。他に土製紡錘車が1点ある。

この発掘によって照丘遺跡が弥生時代の集落跡であることがはっきりしたと同時に、工事中という悪条件でありながら情熱をもって調査されたことに対して深く敬意を表したい。弥生時代の建築用材の出土はこれ以降飯山市内ではみられないのである。

翌38年夏には現グランド東北隅付近で貯蔵穴が発見されている。

昭和42(1967)年の調査 昭和42年4月1日をもって太田・常盤・外様・岡山の4地点の中学校が統合して飯山第三中学校として発足した。その建設用地として現在の地が選定され、5月からブルドーザーによる地均し工事が開始された。その際ここは弥生時代の遺跡地であり工事に際しては十分な注意をするようにと教育委員会に対して、高橋桂が要望していた。そして折をみては飯山南高校照丘分校の考古学クラブ員と現場を見てまわったのである。そして7月中旬に至り地均し工事によって露呈したローム層内に点々と認められる黒色土中から土器が出土していることをクラブ員が発見、高橋に報じたのである。8月16日、夏休みで帰省していた国学院大学生木村幾多郎、宮崎博両氏、秋津の松沢芳宏氏とともに遺跡を調査、大規模な環状周溝遺構であることを確認、直ちに工事の延期と調査の必要性を教育委員会へ申し出て19・20

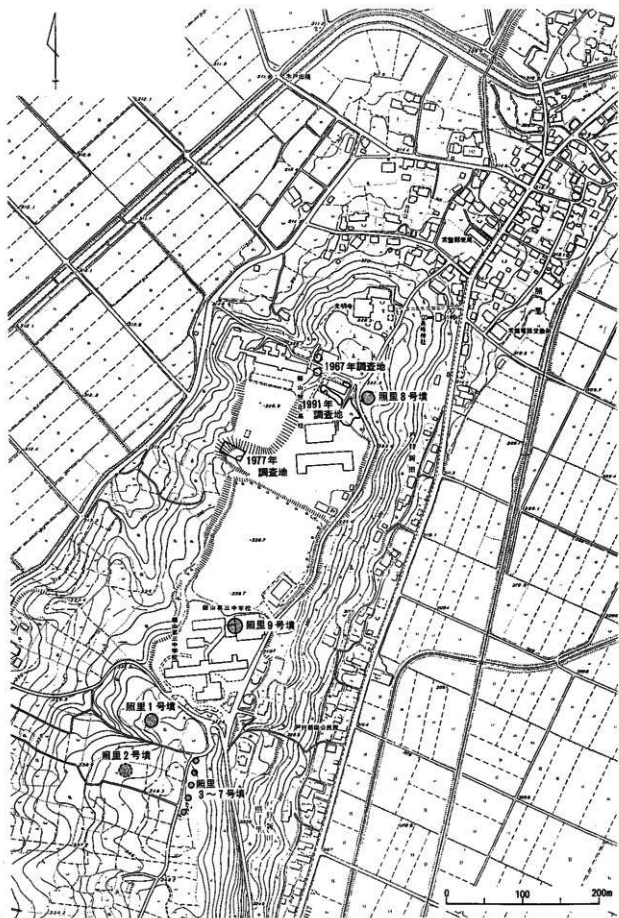


図5 黒丘遺跡と黒里古墳群 1:5000

日の両日にわたって国学院大学永峯光一氏の指導のもと発掘調査が行われたのである。

発掘地点は現第三中学校体育館付近であり、西へ開く沢に挟まれた小舌状台地の頂点にあたり、東は常盤平と千曲川、西は外椽平を一望することができる。

検出された周溝は、南側がすでに破壊されていたものの北側は表土が削平されただけの状態で残されていた。周溝の直径は外周で約26m、内周で約20mを測る。内壁はゆるい傾斜で溝底に至るのに対し、外壁は比較的急角度で掘り込まれている。深さは深い所で70cm。周溝内からは溝底に接するか少し浮いた状態で土師器が部分的に集中して配置されたかのような状態で出土している。

出土した土師器は高坏17、壺1、埴2、坏4であり、和泉式の新しい時期におかれるものである。あえて実年代を示せば、古式須恵器が伴し始める頃すなわち5世紀後半代といえようか。

この周溝の性格については報文では「古墳の采譜を引く埋葬形式」と慎重な記述をされているが、調査した高橋柱も今では古墳の周濠と考えている。なおこの古墳周濠については本報告で照里9号墳と命名した。

またこのような周溝が本例だけでなく、ブルドーザーによる削平箇所を丹念に調査したところ他に2～3か所存在したと報告されている。

この発掘で古墳の周濠が検出された意義は大きい。周溝内への土器供献（あるいは土器を用いた祭祀）という方形周溝墓の要素をもち、葦石・埴輪という古墳の要素をもたないという特色は当地の古墳の特性をうかがう良好な資料となった。長峰丘陵北縁部には、第三中学校の南に照里1号墳（円墳、径18.0m、高2.8m）が、照丘高校東北に照里8号墳（円ないし方、径18m、高2.8m）があり本古墳はその中間地にあたる。他にも2～3か所同例があるとすれば当地は同規模の円墳からなる古墳群と考えることができる。その年代も当例から、5世紀後半には築造がすでに開始されていたと考えられよう。またすでに削平された地表に痕跡をとどめない所でも古墳の痕跡が見つかる場合があることを実証したこととなった。

昭和52(1977)年の調査 昭和52年飯山照丘高校校舎改築に伴って、同校が調査主体（宮林秋男校長）となって実施された。調査は同校教諭であり日本考古学協会員の小林幹男教諭が担当し、児玉卓文・吉岡知雄・関和行同校教諭の指導のもと同校考古学クラブ員によって、7月16日から7月30日までは夏季休業を利用し、以降10月8日までは土曜日、日曜日を利用して実施された。

調査地点は敷地内南端のゆるやかに西に傾斜する所で、約500㎡を発掘した。

検出された遺構は弥生時代後期の竪穴住居址4、円形の溝を伴う特殊遺構1、溝状土坑3である。

竪穴住居址はいずれも隅丸方形ないし隅丸長方形プランで、1・2号が重複し、3・4号が重複している。規模は1号が長径2m、短径1.2m、2号が推定で1号と同規模、3号が長径2.15m、短径1.9m、4号が長径3.2m、短径2.0mでありいずれも小形である。

この発掘調査は高校が主体となり、同校教諭・考古学クラブ員の手で行われたことに意義がある。また調査後竪穴住居が学校敷地内に生徒の手で復元され、冬期における室内の保温効果や雪による建築材の破損状況などが観測され報告されていることも特記される。

参考引用文献

高橋柱「飯山市照丘遺跡出土の弥生式遺物について」『信濃』14-11 1962

高橋柱「長野県飯山市照里環状周溝調査略報」『信濃』20-4 1968

小林幹男・児玉卓文ほか「飯山照丘高等学校敷地内遺跡発掘調査報告書」長野県飯山照丘高等学校 1978

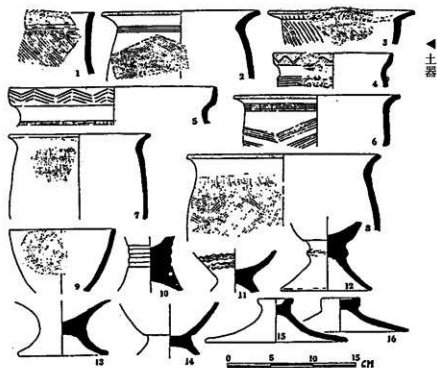
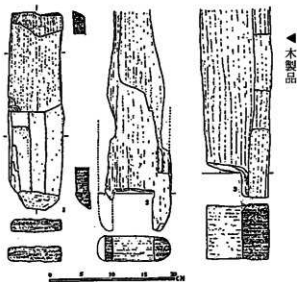
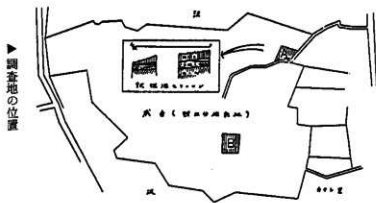
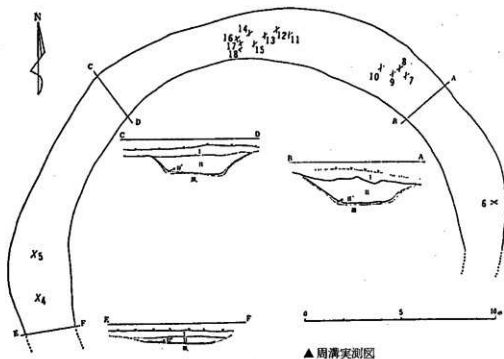


図6 昭和36(1961)年の調査(高橋1962)より転載



▲周溝実測図

▼土器

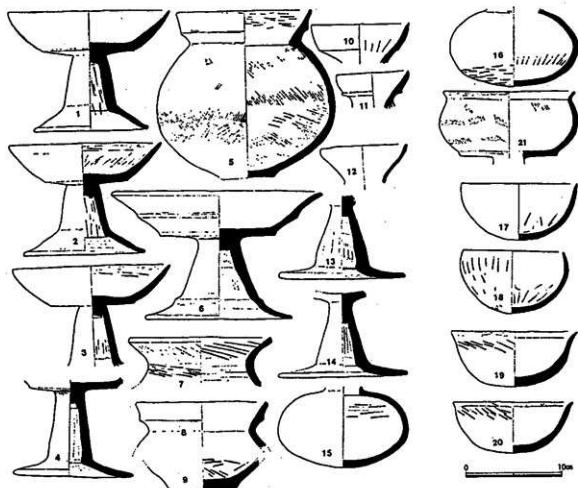
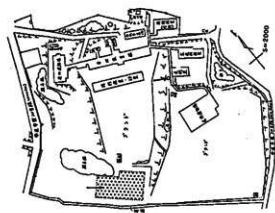
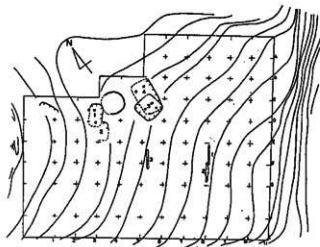


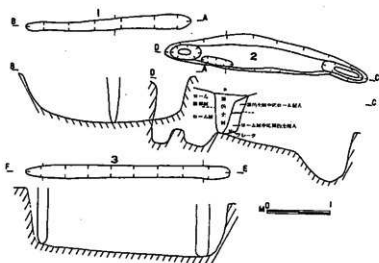
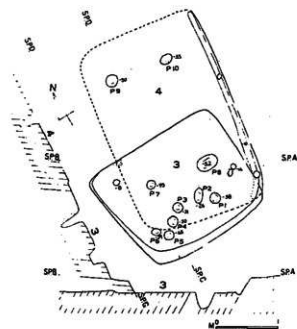
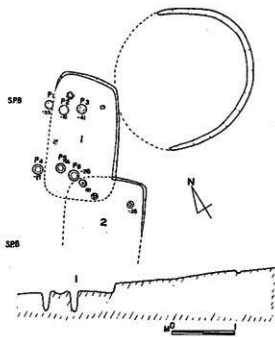
図7 昭和42(1967)年の調査(高橋1968)より転載



▲ 調査地点



▲ 全体図



▲ 透視

図8 昭和52(1977)年の調査1 (小林・児玉1978)より転載

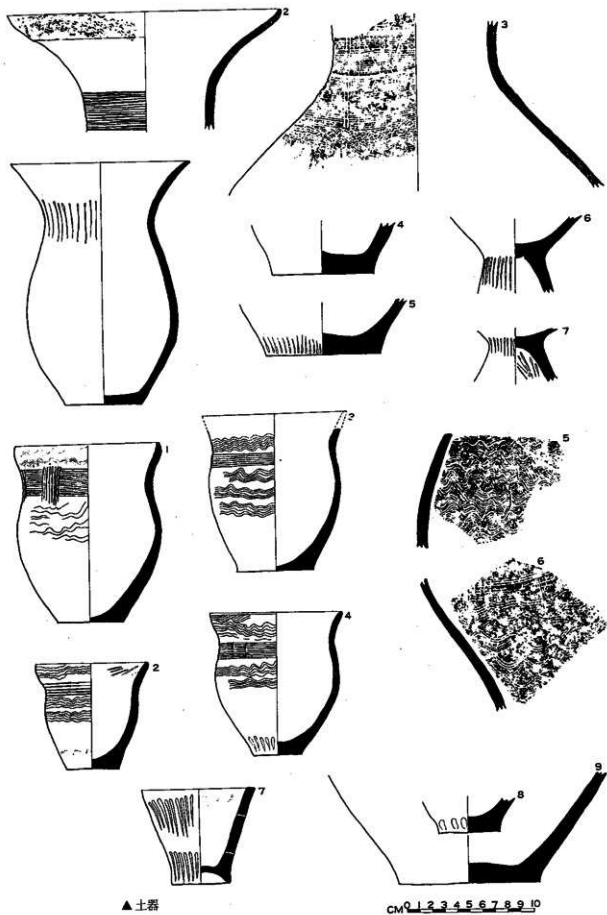


図9 昭和52(1977)年の調査2 (小林・見玉1978)より転載

2 照里古墳群

今回、調査地に東接する照里8号墳の測量調査を実施した。また照里古墳群についての記述が報文によって不統一なのでここで整理しておく。

照里古墳群

『村史ときわ』では「常盤には、「信濃史料」第一巻上（考古資料篇）によると、現存する古墳はわずかに次の三基だけとのことである。すなわち、照里一号墳（円墳）、照里二号墳（円墳）、大塚古墳（円墳）の三つである。

しかし、踏査の結果では、このほかに長峰丘陵全体で十七基の古墳があり、そのうち、大塚以北だけでも、大木氏山林中に三基、高橋氏山林中に一基が存在している。これらはいずれも墳高一メートル内外、墳径も五～六メートルという小規模な円墳で、ボーリングの結果では無石廓式のものである。

大塚古墳は数十年前に盗掘され、照里二号墳は高にならされてしまっただけで原形を留めず、ともに現在は資料価値に乏しい。ただし、数年前に寿区尾崎から出土したという直刀があり、また大塚のある農家の取壊している瑪瑙の勾玉などから、長峰丘陵上に築造された古墳は、いずれも後期後半のものであることがわかったのである（桐原健「常盤のあけぼの」『村史ときわ』1968 27・28ページ）とあり、照里2号墳はすでに畠にならされたことと記されている。

『遺跡分布調査報告Ⅰ』では、種別・範囲・規模・現況の欄で「1号墳が径18.5m、高さ2.8m、2号墳が径16.7m、高さ2.2m、3～7号墳が径6～8m、高さ1～2m、8号墳が径15m、高さ3m」と記され、遺構・遺物の欄で「下水内郡誌によると北端の古墳で嘉永年間に直刀・鍔の類が出土している」と記され、位置・地形の欄で「下水内郡誌によると戸狩地籍の古墳は統計17基とあるが、現在確認できるものは8基にすぎず、従来からの1号墳・2号墳及び飯山第三中学校南側の山林中の5基連続するものを北から3・4・5・6・7とし、照丘高校の北東山林中のものを8号墳とする。『照里遺跡』において検出されている円形周溝は、本古墳中の周溝のみの確認と考えるのが妥当と思われる。地籍範囲としては「照里遺跡」とほぼ重なる。（長野県飯山北高等学校地歴部OB会『遺跡分布調査報告Ⅰ』1977 36ページ）と記されており、照丘高校東北山林中のものを8号墳としている。

『飯山の遺跡』では1号墳から7号墳までを『遺跡分布調査報告Ⅰ』に準じ、昭和42年の調査で検出された円形周溝遺構を8号墳としている（『飯山の遺跡』飯山市教育委員会 1986 47ページ）。

ここでは基本的には『遺跡分布調査報告Ⅰ』にしたがい、第三中学校から小泉へ下る道の南に現存するものを1号墳、畠にならされて現存確認できないものを2号墳、照丘高校東北山林中に現存するものを8号墳、昭和42年の調査で検出された円形周溝遺構を9号墳として整理する（図5）。第三中学校南の丘頂に南北に並ぶ3～7号墳は規模が小さく古墳とすべきかどうか迷うところだが、便宜上照里古墳群に含めておく。『村史ときわ』に記される大木氏山林中の3基、高橋氏山林中の1基は大塚古墳群に含まれるものであるが、形態・立地ともに照里3～7号墳に似ている。

古墳群の築造年代については『村史ときわ』の中で桐原氏が後期後半のものとされているが、9号墳出土の土器は和泉期のもので中期後半にさかのぼる。むしろ横穴式石室墳でないことを積極的に評価すれば、中期から後期初頭に築造の中心があると考えている。

照里8号墳（図10） 照丘高校東北に位置する。長峰丘陵は西斜面はなだらかであるが東斜面は急崖である。8号墳は長峰丘陵頂部平坦面の東端にあって、少し東へ張り出した小根椋の先端に築かれている。古墳の西は第三中学校・照丘高校への通学路で切通しとなっているが、かつては丘頂と一連の平坦面であった。

古墳の現況は山林で、杉の植林となっている。古墳西には墓地があり、墓地に東接して幹囲 250cm 程のケヤキがある。墳頂からケヤキにかけて盗掘と思われる $4\text{m} \times 2\text{m}$ 程の穴がある。「下水内郡誌」による北端の古墳がこの 8 号墳を指すのであれば、嘉永年間に直刀・鎧鉾の類が出土したという穴かもしれない。穴には石等は見あたらず、主体部は石室等でないことの一傍証となろう。

墳形は、等高線を見ると北および南斜面は円を描くが、東斜面は直線的である。測量図からは方墳の感が強いが、今のところ方墳か円墳か決めかねる。

古墳の西南(墓地の南)は少しくぼんでおり、丘陵高所側に掘り割り等の施設があるものと考えられる。

規模は、西の墳裾を墓地南のくぼ地から判断して墓石の西に求め、他は墳裾が比較的明瞭なのでそこに求めると、東西 18m、南北 18m となる。高さは丘陵高所の西側で約 1.5m、東側で約 2.8m である。墳丘東には幅約 7m の平坦面があって、墳丘の量観をきわ出たせている。墳頂平坦面は西側がやや変形し明瞭ではないが、およそ東西、南北とも 9m 程で墳丘全長の約 2 分の 1 である。

葺き石、埴輪などの外部施設は表面観察からは不明である。

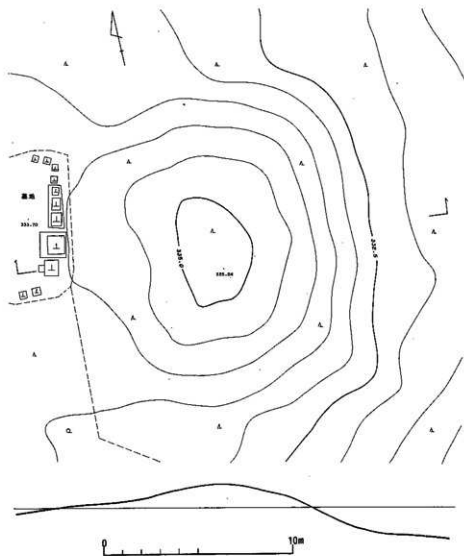


図10 照里8号墳測量図 1:200

3 調査方法

(1) 調査地点

今回の発掘調査対象地はプールおよび小体育館建設予定地で、照丘高校敷地の東北隅にあたり、高校敷地内では比較的旧地形が残っていた所である。地形的には丘頂平坦面であるが、調査地東端は東斜面にかかっており、西端は斜面の一手前である。調査地は全体として南から北へゆるやかに傾斜する。調査地東部の東斜面にあたる所は小さな沢地である。

なお、1962（昭和37）年に高橋が調査したA地点は今回調査地の北西で、合宿所の付近と、卓球場とクラブ部室をつなぐ廊下の西側である。

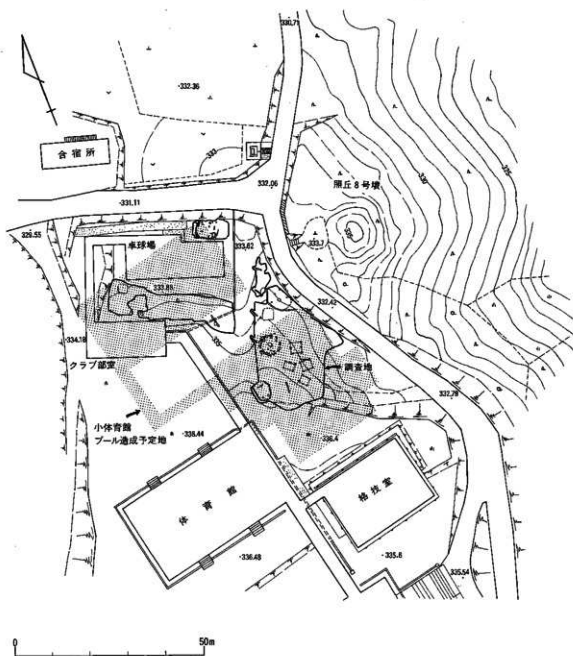


図11 調査地周辺の地形 1:1000

(2) 調査区の設定

調査対象地内に調査区を設定するにあたっては、旧校舎建築時の攪乱をさけるために、あらかじめ重機で試掘をして表土下の状況をみながら行った。そして調査区が分断されたため便宜的にⅠ～Ⅳ区に調査区を呼びわけた(図13右上参照)。

調査区内の地区割りには5mのグリッド法とした。まず調査区に合わせて任意の方眼を組み、北隅を基点として、北東から南西へ1・2・3……、北西から南東へA・B・C……と呼称した。そしてグリッド設定の後基準となる杭(図13基準1～4)を決め、「飯山照丘高等学校実測平面図」(S=1:500)におとせるよう杭の座標を測定した(信濃測量有限会社)。

海拔標高の基準は、体育館からクラブ部室へ行く渡り廊下がクラブ部室手前で屈曲する位置の北隅雨落ち溝のベンチマーク(335.13m)を基準とした。

(3) 調査方法

調査方法は、まず重機によって表土を除去した。その際あらかじめいくつかの地点で試掘を行い、攪乱のない所を中心に表土を除去した。表土除去は、校舎建設時の地ならし等削平された所が多く、地山の黄色粘質土面まで行った所が多い。一部黒色土が調査地東端沢地に認められたが、出土遺物もごくわずかだったので、地形観察のため黒色土も重機で除去した。

表土除去の後、ジョレン・移植ゴテ等で慎重に遺構・遺物の検出を行った。

遺構の掘り下げに際しては、100分の1略測図を作成しつつ、埋土の色・質等を記録しながら掘り下げることとしたが、柱穴が多く遺構全部の記録はとれていない。土坑等はできるだけ半割し土層観察をしたが、これも時間の都合上、実測図でなく、メモ・写真撮影ですます例が多かった。住居跡は十字に畔を残して掘り下げたが、有効であったのはSⅠ1のみで他は周溝のみの検出であったり、浅かったり土層図をとらずに畔を除去した例が多い。

遺物のとり上げは、含包層がなかったので遺構ごとにまとめて取りあげた。柱穴はC5-P1～P5のように地区毎に柱穴番号をつけてすべて柱穴内ということでレベルも測らず一括して取りあげた。SⅠ1のみは1点ずつ番号をつけて地点と高さを測ってとり上げた。この際目じるしとして竹グシに小形の荷札をつけたものを使用した。

遺構全体図は40分の1平板図を作成した。土坑は20分の1ないし10分の1実測図を適宜作成した。

写真撮影は白黒とカラーを35mmのフィルムで適宜撮影した。遺跡遠景は戸狩スキー場などへ天候の良い日をねらって何度か撮影に出かけた。

旧石器の有無の確認については、調査地全面に深い柱穴等がありながら旧石器の出土をみないので、試掘坑を入れて調査することを割愛した。

4 層 序

調査区内の層序は基本的に上層から、暗灰色土層(表土10～15cm)、黒色土層、褐色土層(漸移層)、黄色粘質土層(地山)である。しかし、調査地の大半は旧校舎建築時に造成が行われており、表土層直下ですぐ黄色粘質土層であった。黒色土が堆積していたのは調査地東端のⅡ区Mラインより東の沢地で、厚さは0～100cmである。褐色土層(漸移層)が認められたのはⅠ区南東端のクラブ部室に近い所と、先のⅡ区東端である。厚さは30cm程である。

地山の層序はSKⅠの壁面観察によると、黄色粘質土層(85cm、上にゆくにしたがって褐色味を増す)、黄灰白色粘土層(50cm)、黄褐色粘土層である。

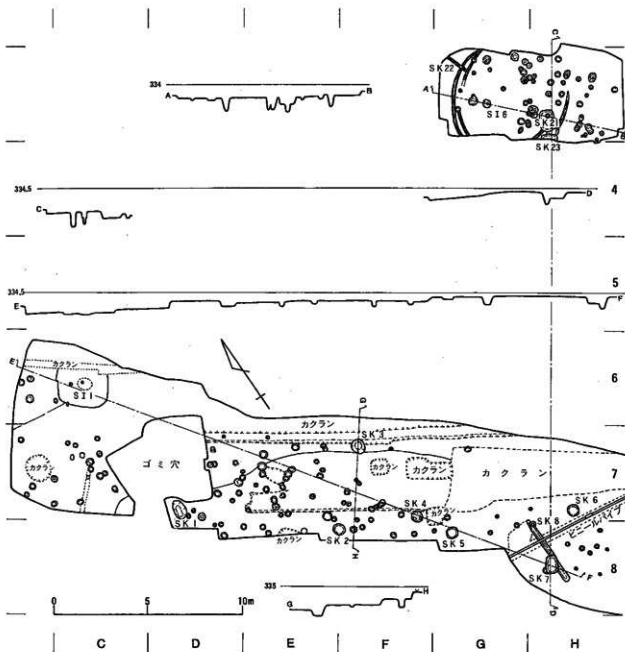


図12 調査地全体図1

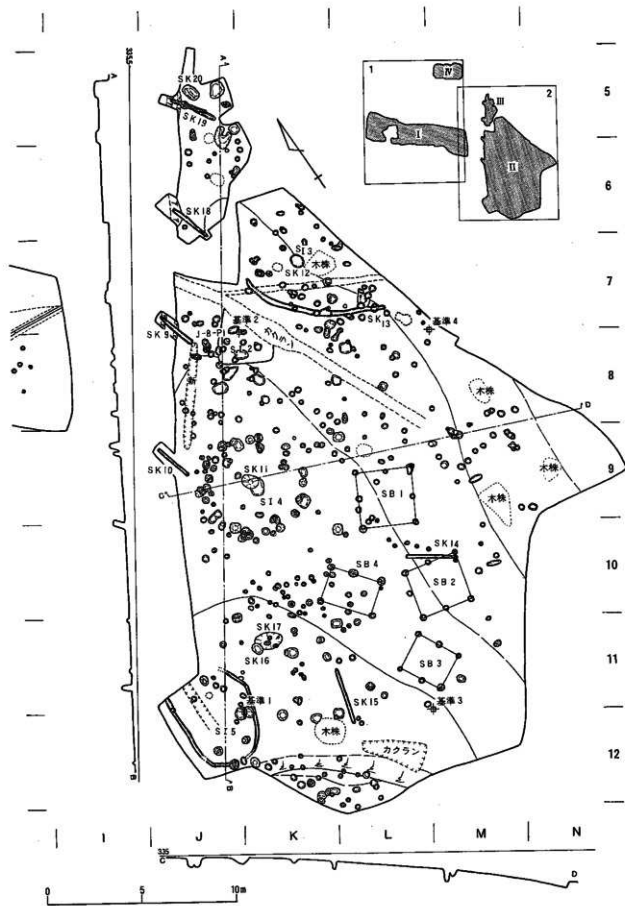


図13 調査地全体図 1: 200

遺構検出面は黄色粘質土層と褐色粘土層であるが、遺構の深さなどから弥生時代の遺構は黒色土層から掘り込まれていたものと思われる。

第4章 弥生時代の遺構と遺物

1 遺 構

弥生時代の遺構は、竪穴住居址6、獨立柱建物4、土器埋納ピット1、土坑などがある。

A 竪穴住居址(図14~16・表1)

(1) S11

C6区にある。ここは長峰丘陵丘頂平坦面の西端にあたり、ゆるやかな西斜面に移行する所である。

隅丸長方形プランの小形住居址で、北東辺は校舎の排水溝で攪乱されている。規模は、長径2.7m、短径は攪乱溝の対岸に北東辺がないことや南東辺の端が隅丸になりつつあることなどから、北東辺は排水溝の中におさまるものと考え、約2.1mと推定される。深さは確認面から約15cmで、中央がやや深く20cmである。

床面中央は0.7×0.6mの焼土層があり、そこは床も焼けている。炉であろう。

壁の立ち上がりはシャープではなく、周溝等の施設もない。柱穴も検出されていない。

埋土は暗褐色系統の土で、中央のくぼみに堆積した黒色土はよく締っていた。

出土遺物は土器・石器であり、全体から散在して出土している。図20-7の覆は小片が全域に分布し、それらが接合している。他の土器も一個体がかたまっておらず分散している。

年代は土器から中期後葉と考えている。

(2) S12

J・K7・8区にある。ここは丘頂平坦面の中央やや東寄りにある。

隅丸長方形プランの小形住居址で、北東辺は新しい排水溝で攪乱されている。検出された深さはごく浅く、5cm以内であり、南西が深く北東へゆくと従って浅くなる。これは東へ向かって深く削平されているためである。

平面規模は東南-北西が2.8m、東北-南西が3.0m以上。

周溝等の施設はなく、柱穴は住居内で検出されているが、主柱穴と考えられる配置でなく、S11同様柱穴はないものと考えている。

埋土は指頭大から半拳大の茶色砂礫を含む暗褐色土で、中央部は締っており貼床と考えられる。

遺物の出土はごく浅いこともあって少量である。弥生時代中期後葉の土器が手掌に乗る程度出土している。

(3) S13

K・L6・7区にある。ここは丘頂平坦面東端にあたり、東斜面にかかる所である。

円形ないし楕円形プランと推定される住居跡で、周溝が西で検出されている。ここも西から東へゆくと従って深く削平されているので東の周溝は確認されなかったであろう。

周溝は幅約10~20cm、深さ5~10cmで、断面形は「U」字形、検出部分の中央ではやや直線的となるが、全体としては弧を描いている。

P1は摺り鉢状を呈しており中央ピットと考えられる。したがってこのピットを中心に周溝のカーブを考えて規模を復元すると、南北が約5.8m、東西が約5.4mとなる。

焼土がP1の西側で、50cm×35cmの範囲で検出されている。炉であろう。

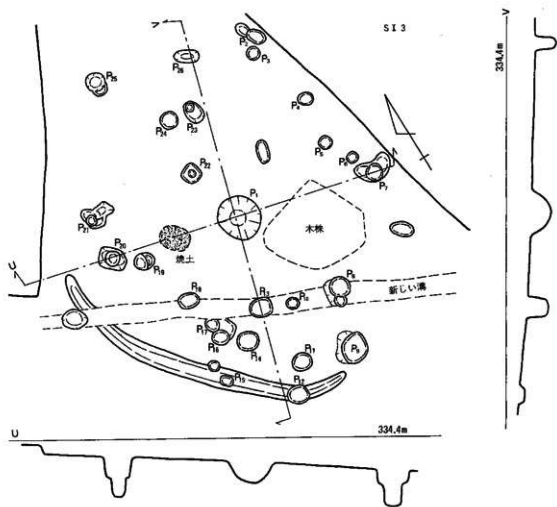
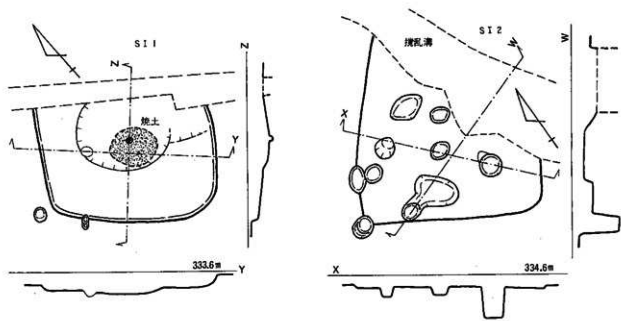
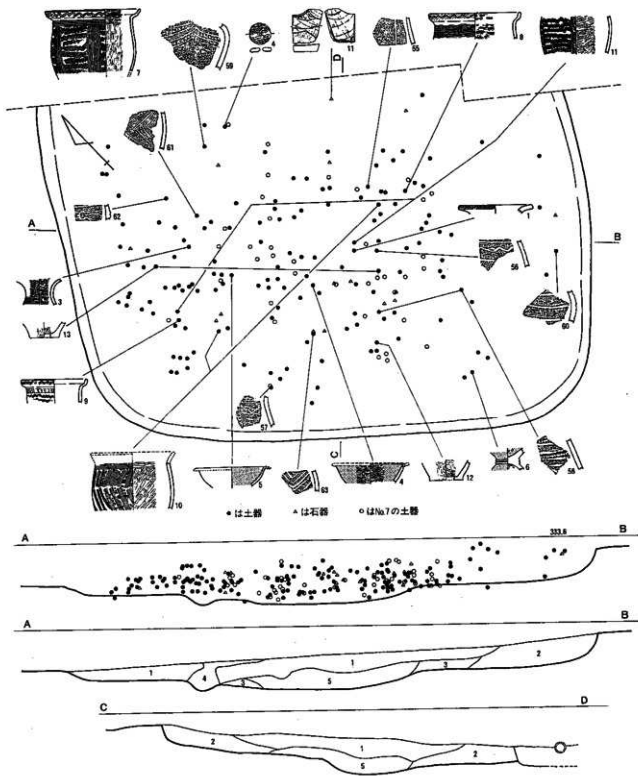


図14 竪穴住居址 SI 1-SI 3 1:60



●は土器 ▲は石器 ○はNo7の土器

- 1 暗褐色土(ロームブロック含む)
- 2 黄褐色土(1よりロームブロック多く含む)
- 3 暗褐色土(1より黒味がつよく粘着性あり、ロームブロック含む)
- 4 黒褐色土(ボロボロした黒色土)=カクラン
- 5 黒褐色土(しまりのよい黒色土、セクションに土器含む)

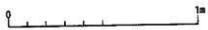


図15 S11 遺物分布図 1:20

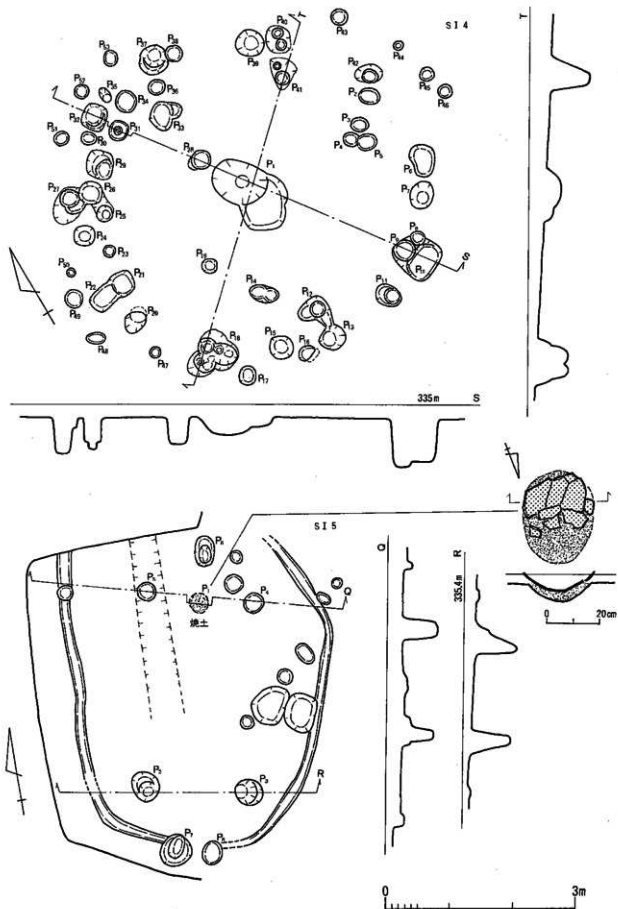


图16 整穴住居址 S14 · S15

主柱穴は、位置および深さから判断して、P4・P7・P8・P14・P20・P24の6か所が推定される。P7・P8は最も深く掘り込まれており、P1を中心に対称する位置にあるので主柱穴としてほぼまちがいないであろう。とすれば、P1を中心にP7・P8を通る円を描くと他のP4・P14・P20・P24が線上にあたり深さも深いので主柱穴と推定した。

遺物は弥生時代中期後半の土器が少量出土している。

(4) S14

J・K9・10区にある。ここは丘頂平坦面の東端にあたる。

周溝や床などは検出されないが、P1を中心に柱穴が円形にめぐっているため、円形竪穴住居址と推定した。

P1は浅い平底の土坑と、摺鉢状の土坑が2つ重複している。焼土粒、炭粒が出土している。炉を兼ねた中心ピットだろうか。炉にしては焼土や炭の量が少なく底面・壁面も焼けていない。

主柱穴は、位置・規模・形態などから、P6・P7・P8・9・10・P11・P13・P15・P18・P21・P22・P24・P25・P26・27・P29・P31・P32・P34・P37・P38・P39・P40・P42が推定される。

主柱穴と推定される柱穴はP1を中心とする直径約5mの円形に並んでいる。したがってS14の規模はそれよりやや大きく、直径6～7mと推定される。

また、主柱穴のあり方からS14は何度か建て替えられたものと推察できる。その回数はP39・P40のあり方などから最底3回は建て替えられたものと考えられる。ちなみに規模・形態が似かよった柱穴をひろってある一時期の主柱穴を推定すると、P6・P9・P13・P18・P21・P29・P37・P40・P42の9か所となる。

主柱穴の深さは50～60cmが平均的であるが中にP9・P30など70cmを越えるものがあり、さらには90cmに近く手を一ばいに延ばして掘るのがやつの柱穴もある。この点ではS13とは異なっており、円形プランで規模も同じくらのS16とよく似ている。

遺物は各柱穴から弥生時代中期後半の土器が少量ずつ出土している。

(5) S15

J・K11・12区にある。ここは丘頂平坦面の東端近くにあたる。

隅丸長方形プランの4本柱の住居址で、周溝が検出されている。

平面規模は東西が3.0～4.0m、南北が推定5.5mである。

周溝は幅約15cm、深さ5～15cmで、ややいびつな隅丸長方形をしている。特に北東隅は内側に「く」の字形に屈曲する。

P1は焼土がつまっていた浅いピットで、上面に甕の胴部がはりついて出土している。炉と考えられる。底面も良く焼けており長く使用されたことがうかがえる。

主柱穴はP2・P3・P4・P5で、直径30～40cm、深さ50～60cm。P2には灰と思われるものが埋まっていた。柱間寸法はP4・P5間が1.7m、P2・P3間が1.5m、P3・P4間が3.0m、P2・P5間が3.1m。

P7・P8は入口の柱穴と考えられるが、間が0.6mとせまい。P6はP4・P5の中間にあるのでS15に関係する柱穴の可能性があるが、他に比べて少し浅い。

遺物は中期後葉から後期初頭の土器が少量出土している。

(6) S16

G・H3区にある。卓球場と道路に挟まれたごく狭い所で幸運にも検出された。ここは丘頂平坦面の中央にあたる。

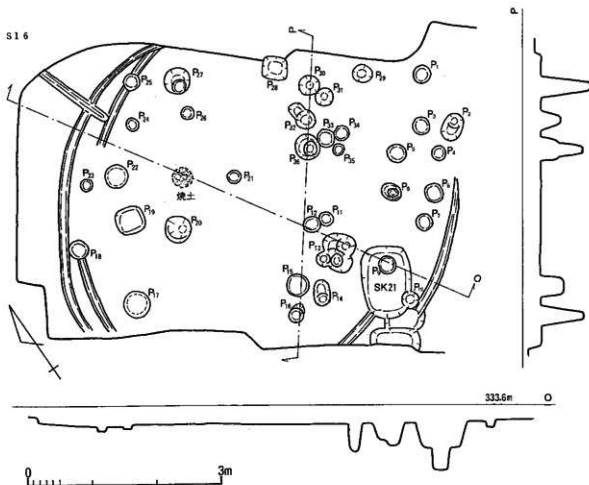


図17 竪穴住居址 S I 6 1:60

円形ないし少し楕円形プランと推定される住居址で、周溝が二重に検出されており、2回の建て替えが行われたものと推定される。

規模はそれぞれの内側と外側の周溝をセットと考えると直径5.5～5.8mと推定される。

周溝は幅10～15cm、深さ5～10cmで、断面「U」字形を呈する。浅いわりにシャープに掘られている。

主柱穴は、位置・形態・規模などからP5・P8・P9・P16・P17・P22・P27・P30・P31・P29が推定される。このうちP17・P22は上面からガラス等が出土したので新しいピットと考えて掘り下げなかったが、後でよく考えると、ここは卓球場造成時に地均しが行われており、やわらかい柱穴にガラス等が埋没したものと考えられるし、また位置・形態ともに他の主柱穴に等しいので主柱穴と考えた。ちなみに、等間で並ぶ主柱穴をひろえば、P5・P9・P16・P17・P22・P27・P30の7か所が一時期の主柱穴と推定できる。

住居址床面のやや北に寄った所で直径30cmの範囲で焼土が検出されており、床面も良く焼けていた。炉であろう。

S I 3・S I 4で検出された中央ピットはない。

遺物は弥生時代中期後半の土器が少量出土している。

SK21 S I 6の中で検出されたのでここで述べておく。S I 6の南隅にある。その南西に近接してSK22がある。卓球場基礎で半分を欠くがSK21とよく似た土坑である。

SK21は長径1.2m、短径0.8m、深さ0.4mの隅丸長方形プランの土坑である。埋土は上下2層に分かれ、上層は黒色土で層厚20cm。下層は黄色粘質土ブロックを含む黒色土で層厚20cm。埋土中より安山岩

の割片が両掌にのる程度出土している。SI6にともなうものかはよくわからない。ともなうものとするば貯蔵穴であろうか。

(7) 小 竈

検出された竈穴住居址は6棟で、3類に分けることができる。

I類は円形プランのもので、SI3・SI4・SI6が相当する。直径は約6mであり、支柱穴は約1.8m間隔でめぐる。同位置で何度か建て替えられている。いずれも中期後半の栗林式期におかれる。照丘遺跡では中期の住居址の発見は初めてであるが、中期土器の出土は周知であり、建築部材も出土している(高橋1967)。

II類は隅丸長方形プランの小形住居址で、SI1・SI2が相当する。いずれも支柱穴をもたず、周溝もない。一辺3m以内である。出土遺物から中期後葉におかれる。

隅丸長方形プランの小形住居は、昭和52(1977)年の調査で4棟検出されている。規模は1号住居が2×1.2m、2号住居が推定1号住居と同規模、3号住居が2.15×1.9m、4号住居が3.2×2mである。いずれも4本柱で、後期に比定されている(小林・児玉1978)。(第3章1参照)

年代的には今回検出されたものと異なり支柱穴をもつ点でも異なっているが、小形である点では共通する。

III類は楕円形に近い隅丸長方形プランの4本柱の住居跡で、SI5が相当する。入り口に2か所の柱穴をもち、奥の柱穴の間に炉をもつ。この形態の住居跡は最近小泉遺跡の発掘で数多く発見され、当地の典型的な後期の住居跡形態といえる。

以上の3類は年代的にはI→II→III類へと推移する。東北信地方では中期から後期にかけて竈穴住居のプランが円形から方形へと変化するといわれている(「長野県史」考古資料編全1巻4 1988)が、照丘遺跡でも同じ傾向がうかがえる。方形のSI1は中期後葉に比定されるのでこの変化は中期後半から始まるのであろう。

B 掘立柱建物(図18)

掘立柱建物址はII区中南部のK-M-9-11区において4棟近接して確認されている。

(1) SB1

L-9・11区にある1間(2.9-3.1m)×2間(2.9m)の建物である。桁行の柱間寸法は1.3-1.6m。柱穴掘形のプランは円形で直径24-35cmだがP1は不定形で直径約45cmである。柱穴の深さは西側柱列(P4-P6)が47-50cm、東側柱列(P1-P3)が23-27cmである。

遺物は、弥生時代中期と思われる土器の小片がP3・P4・P5から、石片がP1・P2・P3から出土している。

(2) SB2

L-M-10・11区にある1間(2.5-2.6m)×2間(2.9m)の南北棟の建物である。桁行の柱間寸法は1.35-1.55mでそれぞれほぼ桁行の中央に柱穴が位置している。柱穴掘形のプランは円形で直径20-32cm。柱穴の深さは西側二隅(P5・P6)が34-45cmで他が17-20cm。

遺物は、P4から、赤彩された大形の鉢の土器片が、重ねて並び立てたような状態で柱穴の上端の、床面から浮いた位置で出土している。また、P1からは石片が、P2からは蓋のつまみ部分が出土している。

(3) SB3

L-M-11区にある1間(2.0-2.1m)×2間(2.4m)の建物である。桁行の柱間寸法は1.1-1.3m。柱穴掘形のプランは円形で直径22-32cm。柱穴の深さは南隅P2が43cmのほかは15-28cmである。

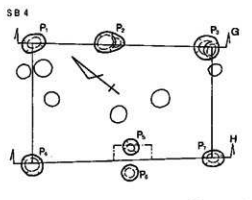
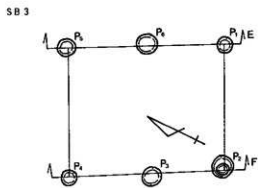
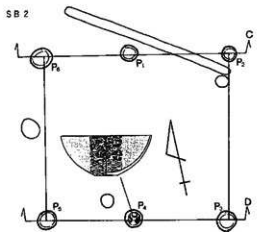
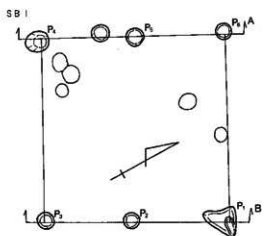


图18 掘立柱建物 SB1—SB4 1:60

遺物はP1・P2より土器小片が少量出土している。

(4) SB4

K・L-10・11区にある1間(1.75~1.9m)×2間(2.7~2.8m)の建物である。桁行の柱間寸法は1.2~1.5m。南西側柱穴のほぼ中央にP5・P6があるが、それらは柱列上から外れているのでSB4の柱穴とするには躊躇される。柱穴掘形のプランは円形で直径25~35cm。柱穴の深さは四隅のものが30~44cm、中央のものが26~37cm。

遺物は各柱穴より、弥生時代中期と思われる土器の小片が出土している。またP3からは砥石が出土している。

(5) 小 結

これらの掘立柱建物は規模・構造ともによく似ており同時代のものと考えられる。規模は最大のSB1でも8.7㎡(2.6坪)と小さく、SB3は4.9㎡(1.5坪)しかない。柱穴の規模も小さいので、住居ではない可能性が高い。

また、SB1の東側(M9区)やSB4西側(K10区)、D・E7区には建物としてまとめられなかったが、等間隔で並ぶ柱穴があり、そこにも掘立柱建物があった可能性がある。

これらの掘立柱建物は竪穴住居址が散在的にあるものに対し、一か所にまとまっている。倉庫と考えられよう。

C その他(図19)

その他の遺構として土器埋納ピットが1基ある。

J8P1 S12の西側、J-8区にある。漏斗状に2段に掘り込まれており、上段は長径40cm、短径30cmの楕円形プラン、下段は長径24cm、短径22cmのほぼ円形のプランである。深さは58cm。埋納土器の甕は、底が失われている他は完全な状態で、ピット上段中央から口縁部を下にした状態で出土している。埋土はやわらかい黒色土が均一に入っていた。

ピットの形状から柱穴と考えられるが、柱を抜きとった後に、胎児の土器棺墓等に再利用したのであろうか。それとも建物廃絶時の祭祀であろうか。今後の課題である。

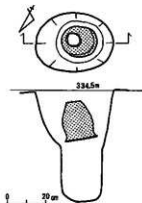


図19 J8P1 1:20

表1 竪穴住居址・掘立柱建物柱穴一覧表

(単位はcm)

番号	深さ	直径	遺物取り上げ番号	備 考
1	30	65	SK12	
2	46	30	K-6 P3	穴2
3	20	20		
4	37	22		
5	22	20		
6	24	18		
7	60	50	L-7 P1	
8	45	32	K-7 P7	
9	50	45	K-7 P8	
10	43	18		
11	56	30	K-7 P9	
12	45	30	K-7 P10	
13	30	35		
14	43	32		
15	24	18	K-7 P6	
16	55	22		
17	33	20	K-7 P5	
18	46	30	K-7 P4	
19	20	30	K-7 P2	段有
20	57	45	K-7 P1	段有
21	50	45		段多い
22	40	30		段有
23	32	30		段有
24	52	26	K-6 P2	
25	36	26		
26	33	35	K-6 P1	

S I 4

番号	深さ	直径	遺物取り上げ番号	備 考
P1	24	130	SK11	
2	20	30		
3	39	28		
4	25	22	K-9 P 3	
5	55	30		
6	45	40		
7	42	40	K-9 P 4	
8	18	20		
9	72	30	K-9 P 5	
10	66	50		
11	58	40		
12	16	25		
13	55	40		
14	40	42	K-9 P 6	双子P
15	57	38	K-10 P 2	
16	50	25	K-10 P 4	ななめP
17	45	25	K-10 P 3	
18	70	60	K-10 P 1	複数P
19	27	20		
20	60	30	J-10 P 2	ななめP
21	60	30	J-9 P13	
22	48	40	J-9 P11	
23	10	18		
24	60	30	J-9 P10	
25	60	25		
26	46	38	J-9 P 8	
27	48	40	J-9 P 9	段有
28	38	30	J-9 P12	
29	77	45	J-9 P 7	
30	10	20	J-9 P14	
31	46	30	J-9 P 5	段有
32	56	40	J-9 P 4	段有
33	42	40		
34	75	30		
35	10	15		
36	43	25	J-9 P15	
37	55	45	J-9 P 2	段有

38	55	25	J-9 P 1	
39	87	40		
40	63	35		穴 2
41	88	35		穴 2
42	47	22	K-9 P 2	
43	40	25	K-9 P 1	
44	32	15		
45	13	20		
46	29	20		
47	10	18		
48	20	20	J-10 P 1	
49	50	25		
50	22	15		
51	26	20	J-9 P 6	
52	27	20	J-9 P 3	
53	10	20		

S I 5

番号	深さ	直径	遺物取り上げ番号	備 考
P1	6	30	SI 5 P 1	焼土
2	57	40	SI 5 P 2	段有
3	63	40	SI 5 P 3	
4	54	30	SI 5 P 4	
5	50	30	SI 5 P 5	
6	32	40	J-11 P 3	段有
7	43	40	J-12 P 1	段有
8	43	30		

S I 6

番号	深さ	直径	遺物取り上げ番号	備 考
P1	14	28	IV区 P 5	
2	44	30		段有
3	34	28		
4	14	20		
5	77	30	P 6	
6	38	30		
7	40	28		
8	61	30	P 7	段有
9	76	25		
10	44	25		
11	20	20		

12	47	20		
13	66	60	P10	重複P 段有
14	38	25		
15	40	30	P9	
16	70	28	P8	
17		40		未掘
18	20	30	P17	
19	10	48	P16	
20	74	40	P15	
21	10	18	P14	
22		38		未掘
23	12	18	P18	
24	8	18		
25	40	24		
26	60	18		
27	65	40		
28	10	40		
29	45	28		
30	74	30	P11	
31	90	28		
32	32	35		段有
33	37	28	P12	
34	12	28		
35	20	20		
36	65	40		段有

S B 1

番号	深さ	直径	遺物取り上げ番号	備 考
P1	23	45	S B 1 P 1	段有
2	24	25	S B 1 P 2	

3	27	25	S B 1 P 3	
4	50	35	S B 1 P 4	
5	47	28	S B 1 P 5	
6	47	24	S B 1 P 6	

S B 2

番号	深さ	直径	遺物取り上げ番号	備 考
1	20	25	S B 2 P 1	
2	20	20	S B 2 P 2	
3	18	30		
4	17	25	S B 2 P 3	
5	45	28		
6	34	32		

S B 3

番号	深さ	直径	遺物取り上げ番号	備 考
1	17	22	S B 3 P 1	
2	43	32	S B 3 P 2	段有
3	22	30		
4	15	22		
5	18	28		
6	28	32		

S B 4

番号	深さ	直径	遺物取り上げ番号	備 考
1	30	30	K-10 P17	
2	26	35	L-10 P7	段有
3	37	35	L-10 P1	段有
4	42	32	K-10 P5	
5	27	25	L-10 P3	
6	17	25		
7	44	28	L-11 P4	

2 遺 物

A 土 器 (図20・21)

(1) S11 出土土器 (図29-1~16、図21-55~63)

壺、甕、高環などが、小片でコンテナ半箱程ある。接合で完形に復元できるものはなく、最も破片の多いNo.7でも約半個体分しかなく、他は同一個体と思われるものが数片ずつあるという状態である。

1・2は壺の口縁部である。いずれも口唇部に縄文がめぐり、器壁の調整は不明瞭だがナアのあとヘラミガキされていると思われる。2の内面はヘラミガキが明瞭である。両者とも胎土に砂粒を多く含み、淡茶褐色を呈する。1は口径推定15.6cm、2は同15.0cm。

3は壺の頸部である。頸部中央よりやや下にへらないし棒状具による沈線をめぐらせ、その間に縄文を施す。器壁は内外面ともにていねいにへらミガキされる。胎土は砂粒を含まない精良な土で、色調は表面が黒灰色、断面が灰白色を呈する。頸部径は推定5.8cmと小さい。

4・5は赤彩の高環ないし鉢である。いずれも体部が内湾し、口縁部が短く外方に折り返される形態である。いずれも内外面ともにていねいにへらミガキされ、赤彩される。胎土はごく細かい砂粒を多量に含む。素地の色調は明るい淡茶色。4は口縁部直下に並列する2か所の焼成前小孔がある。4が口径推定16.2cm、5が口径推定16.4cm。

6は高坏脚部である。脚柱部内面をのぞいてていねいにへらミガキされ、赤彩されている。脚柱部内面はハケ調整。坏部と脚部との境に2条の突帯がめぐらされる。胎土は細かい砂粒を多く含む。素地の色調は明るい淡茶色～淡橙色。

7は口縁部が受け口状となる甕で、住居址内全体から小片が約半個体分出土している。口唇部に縄文をめぐらせ、口縁部外面に2条の櫛描き波状文をめぐらせる。頸部には6条の櫛描き平行線文を横位にめぐらす。胴部は頸部と同原体の工具で6条の櫛描き平行線文を2回ずつ縦位に推定6か所施した後に、その間を不連続な櫛描き波状文を施している。器壁の調整は櫛描き文のおよばない口縁部外面下半と内面全面をていねいにへらミガキしている。胎土はごく細かい砂粒を含む精良な土で、色調は明るい淡茶色。内面は暗灰色から黒灰色で後の黒色土器のようである。口径20cm。

8・9も口縁部が受け口状となる甕である。

8は口唇部だけでなく口縁部外面上半にも縄文をめぐらす。口縁部外面の波状文は1条である。頸部から胴部にかけての施文は7と同じであるが、縦位の櫛描き平行線文があるかどうかは小片のため不明。内面の調整は細かいハケ。胎土、色調は7とよく似ている。口径推定19.3cm。

9は小形品で頸部は櫛描き簾状文となる。胎土は7・8とちがひ砂粒を多く含む。色調は淡茶色。内外面とも磨減がはげしい。口径14.0cm。

10は口縁部が「く」の字形に外反すると推定される甕である。頸部に櫛描き平行線文をめぐらし、胴部に頸部と同じ工具で平行線文を羽状に施す。器壁の調整は外面はハケ、内面はハケのちていねいにへらミガキされる。胎土はごく細かい砂粒を含む精良な土で色調は明るい淡茶色。外面は煤で黒色を呈する。

11は胴部に不連続な櫛描き波状文をめぐらす甕である。特色は不連続な櫛描き波状文の接続点を同位置で故意にもり上げて、推定6か所の縦線を作っていることである。器壁の調整は外面はハケ、内面はていねいにへらミガキされる。胎土はごく細かい砂粒を含む精良な土で、色調は黒灰色。内面は黒色土器のようである。

12～16は底部片である。12は内外面ともにていねいにへらミガキされ、内面は黒色土器のようである。胎土はごく細かい砂粒を含み精良。13も内外面ともにていねいなへらミガキだが、胎土に砂粒を多く含む。14～16も胎土に砂粒を多く含む。

55～58は壺の頸部片である。

55は懸垂文をもつもので、懸垂文はへらないし棒状具による沈線で画され、中に櫛描き平行線文が入る。調整は外面がへらミガキ、内面がハケ。胎土は精良で、色調は淡茶色。

56はへらないし棒状具による沈線文を直線ないし波状にめぐらせ、下位に縄文をうめている。胎土は精良だが焼きが悪くもろい。茶褐色を呈する。

57は沈線と櫛描き波状文をもつもので、櫛描きの波状文は一部みだれている。内面の調整はへらミガキ。胎土に砂粒を多く含む淡褐色を呈する。

58はへらないし棒状具による沈線の間に、刺突文と縄文を交互に配するものである。胎土に砂粒を含み、

淡黄灰色を呈する。

59は壺胴部片で、へらないし棒状具による波状文の間に縄文と刺突文を配するものである。外面はヘラミガキ、内面はハケ。胎土に砂粒を含み、茶色を呈する。同様の文様構成をもつものが図示していないが他に数点あり、調整は等しい。なかに1点胎土精良で赤橙色のものがある。

60はへらないし棒状具による平行沈線文をもつものである。内面はハケ。細かい砂粒を多量に含む精良な胎土で、色調は淡黄灰色。同様の文様構成のものが他に数点ある。

61は櫛描きの羽状文をもつ胴部片である。内面はていねいにヘラミガキされる。胎土に砂粒を多く含む、淡茶色を呈する。

62はへらないし棒状具による沈線文の間に縄文を配し、沈線文の交点に円形浮文を貼り付ける。胎土は精良で、素地は淡黄灰色、外表面は黒灰色を呈する。

63はへらないし棒状具による重山形文をもつものである。外面はハケ、内面はハケのちヘラミガキ。胎土はごく細かい砂粒を多量に含む精良な土で、淡茶色を呈する。

(2) S I 2 出土土器 (図20-18、図21-72)

S I 2は検出面からの深さが5cm以内とごく浅かったので、出土土器は全部で両掌にのる程度と少なく、またすべて小片である。

17は甕ないし鉢の口縁部片である。口縁部は外方に短く強く屈曲し、口唇部に縄文をめぐらす。頸部にはへらないし棒状具による沈線文と刺突文をもつ。外面は赤彩されている。調整は内外面ともにヘラミガキ。胎土に砂粒を多く含む、素地の色調は茶色である。口径14.7cm。

72は壺の頸部である。へらないし棒状具による繊細な沈線で平行線文と鋸歯文をめぐらす。鋸歯文をめぐらすものは珍しい。調整は外面がヘラミガキ、内面がハケ。胎土は砂粒を少し含むが精良。淡黄灰色を呈する。

他に図示していないが、沈線の間に縄文を配する壺の頸部片、櫛描き羽状文の施された甕の破片などがある。

(3) S I 3 出土土器 (図20-19~23、図21-68~70)

S I 3は埋土がほとんどないので、S I 3内に推定される柱穴出土の土器を一括しておいた。したがって混入品があるかもしれない。出土量は全部で両掌にのる程度であり、小片である。

19は甕ないし鉢の口頭部片である。P17出土。短くゆるやかに外方へ屈曲する口縁部をもち、口唇部に縄文をめぐらす。頸部から胴部にかけてへらないし棒状具による沈線で平行線文と重弧文を描き、その間に縄文と刺突文を配する。調整は磨減がはげしく不明。胎土に砂粒を多く含む、淡黄灰色を呈する。口径20cm。

20~22は甕ないし壺の底部である。20がP1、22がP21出土。20は外面がていねいなヘラミガキで内面はハケ。砂粒を多く含む、茶色を呈する。壺であろう。21は細かい砂粒を含むが精良な胎土で、淡茶灰色。22は砂粒を多量に含む、黄白色を呈する。

68はP18出土。甕の胴部片で頸部にへらないし棒状具による沈線を1条めぐらし、胴部に櫛描きの懸垂文と不連続な波状文をもつ。後期的な様相である。内面はヘラミガキ、胎土に細砂粒を含み、色調は外面が黄灰色、内面は黒色土器のようである。

69はP9出土。重山形文をもつ無頸壺の口縁部近くの破片と思われる。山形文の間に縄文があるかどうかは磨減のため不明。内面の調整はヘラミガキ。砂粒を多量に含む、茶褐色を呈する。

70はP26出土。へらないし棒状具による重山形文をもつ鉢の口縁部片である。山形文の間に縄文を配する。内面はヘラミガキされ赤彩されていた可能性がある。ごく細かい砂粒を多く含む精良な胎土で、淡茶

色を呈する。

以上の他に図示していないが、周囲に刺突文を配する櫛描きの懸垂文をもつ壺の頸部片がP21から、P17から縄文を配した2条の突帯をもつ壺頸部片が出土している。

(4) S I 4 出土土器 (図20-18)

S I 4も埋土がなく、S I 4内に推定される柱穴出土土器を一括しておいた。出土量は全部で両掌に山盛り程度であり、いずれも小片である。

18は壺の底部でP43出土。砂粒を多く含み淡褐色を呈する。

この他に図示していないが、沈線と縄文をもつ壺の破片がP9などで、櫛描き羽状文をもつ甕の破片がP36などで出土している。またP20から不連続な櫛描き波状文をもつ甕の破片が出土している。

(5) S I 5 出土土器 (図20-23-29)

S I 5は埋土がわずかに残っている。また主柱穴や炉かのはっきりしているのでその土器を一括した。出土量はS I 4の3倍程である。

23は炉と考えられるP1から出土。大形の甕の胴部で、櫛描きの格子目文をもつ。胴部の約3分の1周が残っている。表面は磨滅がはげしく器壁の調整は不明瞭だが、内面の一部でハケが観察された。胎土に砂粒を多量に含み、淡黄灰色を呈する。

24はP3出土。高坏坏部で赤彩されている。外方に屈曲して大きく開く高坏坏部で、器壁の厚さは薄い。この形態の高坏は中期には見られず、後期的である。胎土は細かい砂粒を多量に含み、淡黄褐色を呈する。25-29は底部である。26がP5、29がP1から出土。26は外面に煤が付着している。

他に図示していないが、赤彩された壺の破片が数点あるとともに、中期的な沈線と縄文をもつものもある。

(6) S I 6 出土土器 (図20-30-32、図21-66)

S I 6も埋土がなく、周溝内の柱穴出土土器を一括しておく。出土量は両掌にのる程度。

30はP13出土で、短く外反する口縁部をもつ。胴部外面にへらないし棒状具による「コ」の字重ね文をもつ。調整は胴部外面がハケ、他はていねいにへらミガキされる。胎土に砂粒を多く含み、茶色を呈する。口径14.5cm。

31・32は底部である。両者ともにハケ調整され、胎土に砂粒を多く含む。

66はP13出土。刺突文を囲む沈線を「工」字文風に配した鉢で、縄文を地文とする。栗林式でも古式である。胎土に砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈する。

この他に図示していないが、列点文を胴上半にめぐらす甕、櫛描き簾状文と羽状文をもつ甕などが出土している。

(7) S B 1 出土土器 (図20-33・34)

柱穴より出土したものを一括した。

33は甕口縁部で、磨滅がはげしい。胎土に砂粒を多量に含み、暗灰色を呈する。口径15.5cm。P5出土。

34は底部でP5出土。胎土・色調とも33によく似ており33の底部かもしれない。

他に図示していないがP4から櫛描きの羽状文をもつ大形の甕の破片が出土している。

(8) S B 2 出土土器 (図21-35・36)

S B 2は、P1・P2・P4から土器が出土している。

35は大形の赤彩の鉢で、P4から約4分の1個体分の破片が故意に詰め込まれた状態で出土した。内外面ともにハケののちていねいにへらミガキされ、赤彩されている。口径推定28.4cm、器高推定12.6cmと大形である。胎土に砂粒を多く含み、茶色を呈する。底部から胴部下半にかけて直径12cmの黒斑がある。

36は蓋のつまみで、P2出土。砂粒を多く含み、明るい淡赤褐色を呈する。

(9) J8P1 出土土器 (図21-37)

37はピットに埋納された土器で、底がぬけている他は完形品である。短く外方に屈曲する口縁部と倒卵形の胴部をもち、平底と思われる。口唇部に縄文がめぐる。調整はハケののちヘラミガキされるが、胴下半はヘラケズリが加えられている。胴外面上半には煤が厚く付着しており、胴内面下半は直径2~5mmの円形の剥落が隣と接して密集している。よく使用されたものだろう。胎土は細砂を多く含む良好。色調は暗茶褐色である。口径17.4cm、器高推定20.5cm。

⑩ その他 (図21-38~54・64・65・67・71)

弥生時代の遺構に伴うもの以外をその他にした。

38・39は単純に外反する壺の口縁部で、口唇部に縄文をめぐらす。38がSK20、39がL11P2出土。38は口径推定15.8cm、胎土に砂粒を多く含む、茶褐色を呈する。39は口径推定10.4cm、胎土に砂粒を多く含む、明るい橙灰色を早する。

40は受け口状の口縁部をもつ壺ないし甕の口縁部で、SK17出土。口唇部および口縁部外面に縄文をめぐらし、ヘラないし棒状具による波状文を口縁部外面にめぐらす。胎土は細砂を多く含むが良好。色調は茶灰色。口径推定18.4cm。

41は壺の頸部でK8区ピット出土。外面はハケからヘラミガキ、内面はハケだが板ナデ状である。胎土に細砂を多量に含むが良好。茶褐色を呈する。

42は高環の脚裾部で、内外面ともていねいにヘラミガキされる。SK5出土。裾部の径は推定15.7cm。胎土は砂粒を含み、色調は黒色で光沢があり黒色土器のようである。

43~46は甕である。

43はSK3出土。短く外方に屈曲する口縁部をもつ。口径推定18.8cm。頸部に櫛描きの簾状文をもちその下にヘラないし棒状具による沈線をめぐらす。胎土に砂粒を多く含む、淡茶褐色を呈する。

44は短く直線的に屈曲する口縁部をもつもので、口唇部に縄文をめぐらす。口径推定16.8cm。胎土に砂粒を多く含む、茶褐色を呈する。

45は口唇部が肥厚するもので、J6区出土。推定口径13.7cm。頸部に煤が付着している。胎土は細砂を多量に含む精良、色調は暗茶褐色。

46は小形の甕でJ5区出土。口縁部はやや受け口状になり、口唇部に縄文がめぐる。頸部に櫛描き平行線文をめぐらせ、その下に波状文をもつ。口径推定11.3cm。胎土は細砂を多量に含むが良好。茶褐色を呈し、内面は黒色を呈する。

47は高環の脚と思われる。K12区P8出土。高環としても小形品であり粗成品である。胎土に砂粒を含み灰白色を呈する。

48は蓋でSK3出土。つまみ上面に葉脈圧痕が残る。胎土に砂粒を含み、明るい黄灰色を呈する。

49は小形の甕ないしミニチュア品。L7区出土。推定口径6.8cm。外面はハケ、内面はヘラミガキ。胎土に砂粒を含み、茶褐色を呈する。

50~54は底である。50は外面がヘラミガキ、53は赤橙色である。

64はL12区P12出土。壺頸部で、縄文を地文として、ヘラないし棒状具による沈線と刺突文に囲まれた中に櫛描き平行線文を配する懸垂文をもつ。胎土に砂粒を多量に含む淡茶色を呈する。

65はK7区P3出土。ヘラないし棒状具による直線文と波状文をもつ。胎土は砂粒を多量に含むが良好。淡茶色を呈する。

67はK8区P4出土。ヘラないし棒状具による太い沈線をめぐらせ、その中に縄文と櫛描き平行線文を配する。内面はていねいにヘラミガキされる。胎土に砂粒を多量に含む、素地は茶褐色、表面は黒色を呈

する。

71は無頸壺の口縁部で、L7区出土。ヘラないし棒状具による太い沈線で重山形を描き、その間に縄文を配する。胎土に砂粒を多量に含み、淡茶褐色を呈する。

図示したものは以上だが、この他にも縄文を地文とし沈線をもつ中期的なものや、赤彩された後期的なものがあるが、量的には中期的なものが多い。

(1) 小 結

以上出土土器の個々について大まかに説明した。ここではS I 1出土土器をはじめとする土器群の年代と特色について少し述べてみる。

飯山地方の弥生土器編年 北信地方の弥生時代の中期から後期の土器編年は、笹沢浩氏によって、新諏訪町Ⅲ(荒山)→栗林Ⅰ→栗林Ⅱ→百瀬→吉田→箱清水→御屋敷の編年案が示されている(笹沢1977)。また神村達氏は笹沢案を概ね踏襲し、栗林Ⅰ古→(荒山)→栗林Ⅰ新→栗林Ⅱ→吉田→箱清水→御屋敷→の編年案を示されている(神村1988)。

飯山でも笹沢編年に基づいて高橋桂・太田文雄両氏によって、小境→鍛冶田D→鍛冶田C→田草川尻Ⅰ→田草川尻Ⅱの編年案が示されている(高橋・太田1980)。

そしてこれらの編年の対応は表2に示したとおりであるが、この対応は厳密な対応ではない。

この編年を今大づかみにみても、中期後半は、中野市栗林遺跡出土土器を指標とする栗林式土器を編年の核として、後期は長野市箱清水遺跡出土土器を指標とする箱清水式土器を編年の核として、両型式の細分および両者の間をうめる形で中間型式を設定している。そして細分や中間型式の設定は、栗林式のもつ要素(中期的要素)と箱清水式のもつ要素(後期的要素)の多寡によっている。

栗林式の要素は①壺の形態が下ぶくれで長頸である。②ヘラないし棒状具による沈線文(平行線文・山形文・波状文・懸垂文)や刺突文の盛行、③文様帯の地文として、また口唇部への縄文の施文、④口縁端部の指オサエの存在、⑤甕は口縁部が短く外反し、体部最大径が上位にある、⑥「コ」の字重ね文の存在、などがあげられる。

箱清水式の要素は、①形態・技法とも画一化されていること、②壺は大きく朝顔状に開く口縁部をもち、頸部に櫛描き「T」字文を施す、③高坏、鉢の盛行、④赤色塗彩の盛行、⑤甕は口縁部が長く開き、不連続な櫛描き波状文(中部高地型櫛描文)が盛行、などがあげられる。

以下当遺跡出土の土器の年代を栗林編年に基づいて考えてみることにする。

S I 1 出土土器の年代 S I 1出土土器の特色を列記すると、①縄文施文の盛行、②沈線文の盛行、③甕の口縁部が受け口となるにせよ短く外反する、④高坏、坏の赤色塗彩、⑤甕における不連続な櫛描き波状文の盛行、があげられる。

これらのうち①～③は中期的要素であり、④・⑤は後期的要素である。壺・甕などの基本的なプロポーションは中期的でありつつも、施文において後期的要素が盛行している。したがってS I 1出土土器は栗林Ⅱ式併行期つまり中期後葉におかれよう。

その他の土器の年代 S I 2出土土器は点数が少ない。沈線文・縄文の盛行は栗林式の特徴であり、栗林式の中におかれようが、S I 2の平面形は隅丸長方形でS I 1に等しい。古相をもつものが出土しているということだろう。

S I 3出土土器は栗林式の中におさまる。

S I 5出土土器のうち23は大形の甕であるが、胴最大径は下位にあって後期的である。24の高坏は後期に盛行する形態である。また図示していないが、赤色塗彩の壺も存在する。

しかし沈線文や縄文も少なからずみられる。これらの点から、S I 1よりやや後出的と考える。中期末

葉～後期初頭と考えておく。

S I 6の30は「コ」の字重ね文をもち栗林式である。66は「工」字文風の文様をもち栗林式でも古式である。しかし頭部に菊描き簾状文をもつ鏝がある。S I 1より古相であるが、やはり栗林II式の中におさまり、II式でも古い段階におかれよう。

S B 2は、大形の鉢35が出土しているが、鉢は中・後期を通じて形態の変化があまりない。今後の課題である。

遺構以外の出土品も、沈線文、縄文の盛行、甕の形態からその中心は栗林II式にあると考えられよう。

表2 弥生土器編年の対比

	畿内	千曲川流域		飯山 (高橋・太田1980)
		(笹沢1977)	(神村1988)	
前期	I期 古 新	(新諏訪町I)	林里	
		II期	伊勢宮(新諏訪町)	
中期	古 III期 新	新諏訪町III(荒山)	栗林I 古	小境
		栗林I	栗林I 新	鍛冶田D
		栗林II	栗林II	鍛冶田C
後期	V期	吉田	吉田	田草川尻I
		箱清水	箱清水	田草川尻II
古墳		御屋敷	御屋敷	+
				柳町

文献1-134号23ページおよび文献2・文献5より作成

参考文献

- 1 笹沢浩 1977「入門講座・弥生土器—中部高地1～3」『考古学ジャーナル』131・133・134
- 2 飯山市教育委員会 1980『長野県飯山市旭町遺跡群—鍛冶田』
- 3 飯山市教育委員会 1978『長野県飯山市田草川尻遺跡II』
- 4 飯山市教育委員会 1985『長野県飯山市旭町遺跡群—北原遺跡IV』
- 5 神村透 1988「弥生土器」『長野県史』考古資料編全1巻4

B 石器 (図22、表3)

調査区内より出土した石器及び石製品は、総数で約200点に及ぶ。このうちのほとんどは安山岩製の剥片・碎片であり、製品もしくは使用したと思われる石器は図22に掲げた僅か13点であった。なお、剥片が多く出土した遺構はS I 1、S K 21である。これらの石器の年代については、出土状態から弥生中期に限定してさしつかえないと考える。以下に図示した石器を個体別に説明を加えていくこととする。

(1) 石 鏝

1 舌部が欠損するが、扁平で優美な形態を呈している。不定形な横長の剥片を素材とし、縁辺のみに細かな交互剝離を施している。S I 4のビット28より出土している。

2 青白色の凝灰岩系統の石材を素材としている。舌部の大きな有蓋鏝で、尖頭部は特に入念に加工さ

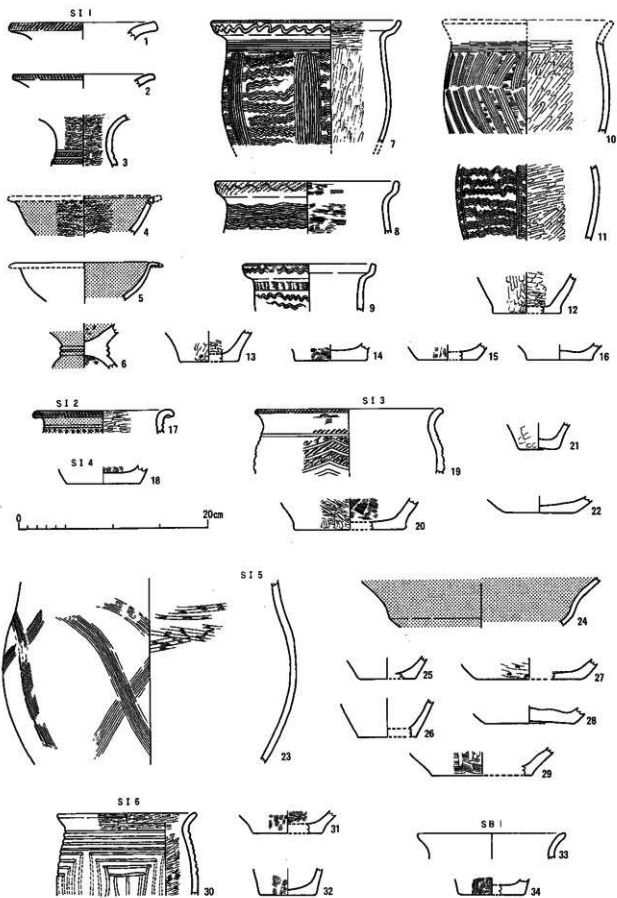


図20 弥生時代の土器 1 1:4

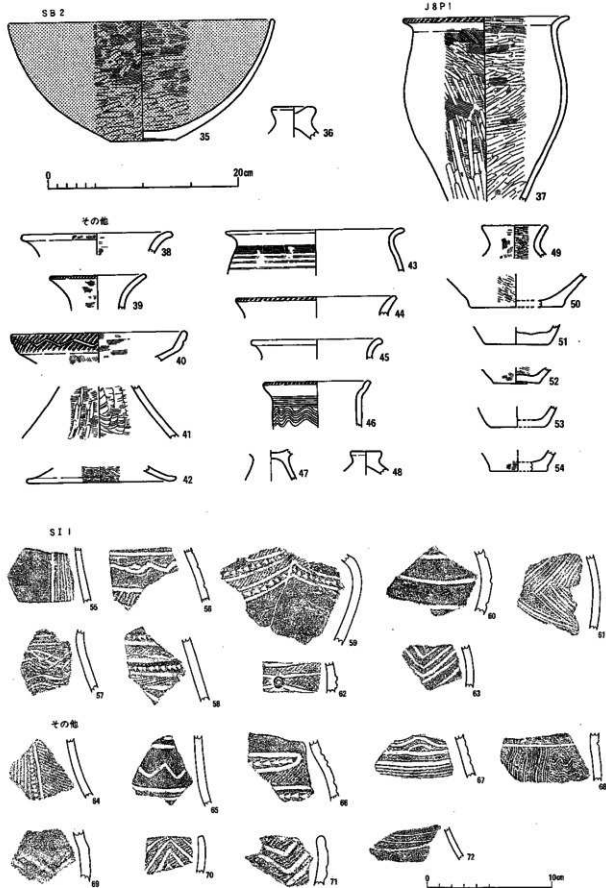


図21 弥生時代の土器 2 35-54 1:4 55-72 1:3

れている。比較的厚みがあり、正面側は急斜な加工が施されている。K-10区のビットより出土している。

3 小形の石鏃である。正面左縁辺が欠損しているため、本来は有茎の整った二等辺三角形を呈しているものと思われる。正面に比較し裏面はやや雑な整形である。J-8区SI2に近接したビットより出土している。

4 身中ほどより欠損している。横長のやや反った剥片を素材としているために、先端部は上方に反っている。周縁に加工を施して整形しているのみである。K-10区のビットより出土している。

5 未製品と思われるような雑な作りの鏃である。湾曲した素材に周縁や舌部の挟りを入れて仕上げている。M-10区の出土。

6 尖頭器の範疇に入るかもしれない。交互剝離によって仕上げているが、加工自体は雑な作りで、形態も整っていない。基部側は、折損した後正面左縁・裏面左縁からそれぞれ槌状の加工が施されており、再加工して使用したことが伺える。原形は石槍であったろう。

(2) 石 鏃

7 安山岩製の剥片を素材とし、尖鋭な刃部を作り出してドリルとしている。正面側は、先端左側縁に簡単な加工を施し、主に裏面に多くの整形加工を施している。J-10区のSI4ビット21より出土している。

(3) スクレイパー

定型的な石器でなく、石器の縁辺に刃部を作出した削器的機能を想定した石器の総称として「スクレイパー」とした。

8 横長の剥片を素材とし、湾曲した第一次剝離面を正面側として表面側端部に刃部を作出している。安山岩製で、SI3のビット19より出土している。

9 第一次剝離面の打面を上部にして図示した。刃部が周縁にくまなく施されているために、図示の方法についても躊躇した。刃部は正面の全周に及び、特に入念に施される部分は図の上面の弧状の形態を呈している箇所である。右側につまみ上に挟られた箇所があるが、意図的であるかどうかはにわかに判断できない。裏面側には加工は施されていない。SK4内より出土した。

10 横長剥片を素材とし、側縁の端部に加工を施している。打製石斧にも似るが、重量感はない。SK21の出土である。

11 大型剥片の裏面端部に加工が施される石器である。破損しているために形態については判然としなない。SI1より出土している。

(4) 石 核

12 塊状の石核で、縦長の作業面が看取されるが、多方向から大小さまざまな剥片を作出している。打面は調整されている。L-7区のビットより出土した。安山岩製。

(5) 礫 石

赤みがかったレンガ状の軟質の石材で、上下両端を欠くが、扇状の礫石である。使い込まれたと思われる、作業面が凹状になっている。SB4のビット3の出土である。

C 土 製 品 (図23)

土製品として紡錘車およびその未製品が計4点出土している。すべて弥生時代の竪穴住居址から出土しており、弥生土器片を用いてつくられている。

1・2は未製品である。1は、赤色塗彩の鉢の破片を用いており、片側からの孔がほぼ裏面に達するところまであけられている。直径3.5~3.8cm、厚さ0.5cm、重さ8.9g。SI6の周溝内側のビットP23から出土している。2は中央の孔をあけるに両側からあけているが、共に浅く、一方はわずかに点として残る

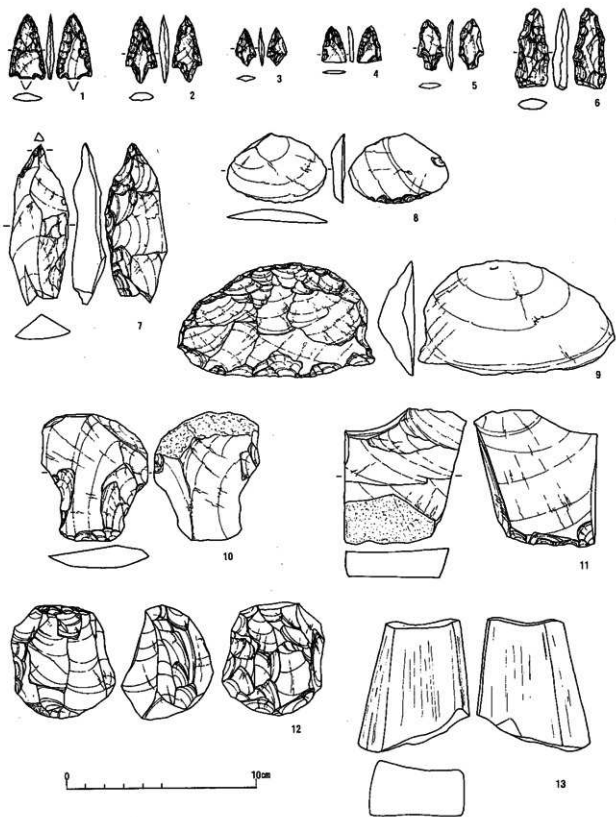


図22 弥生時代の石器 1:2

程度である。裏の小片を用いている。直径2.4~2.6 cm、厚さ0.6cm、重さ4.9g。S I 3の中央ビットP 1から出土している。

3・4は製品となっている。孔のあけ方はどちらも両面穿孔と思われる。3はへらないし棒状具による波状文を持つ壺の小片を用いている。直径4.2~4.4cm、厚さ0.4cm、重さ10.2g。S I 4の円形にめぐる支柱穴の1つP18から出土している。

4は櫛描き波状文の裏の小片を用いている。直径3.3cm、厚さ0.45cm、重さ7.0g。S I 1の焼土の北側付近から出土している。

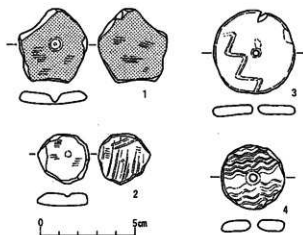


図23 紡錘車 1 W P18 2 S K12
3 K10P1 4 S I 1 1:2

表3 出土石器・石製品計測表

番号	石器名	石質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	破損	備考	石器固体番号
1	石 鏃	安山岩	3.4	1.9	0.5	2.4	○	S I 4	J 9-P 9
2	石 鏃	凝灰岩	3.6	1.7	0.5	2.4			K10-P 6
3	石 鏃	安山岩	2.0	1.1	0.3	0.5	○		J 8-P 5
4	石 鏃	安山岩	2.0	1.3	0.2	0.6	○		K10-P 7
5	石 鏃	安山岩	2.7	1.4	0.4	1.5			M10
6	石 鏃	安山岩	4.1	1.8	0.8	5.7	○		K 6-P 2
7	石 錐	安山岩	8.3	3.1	1.8	32.9		S I 4	G10-P 2
8	スクレイパー	安山岩	3.7	5.3	0.7	14.4		S I 4	K 7-P 2
9	スクレイパー	安山岩	6.1	10.4	2.0	102.5		S K 4	S K 4
10	スクレイパー	安山岩	6.8	5.6	1.2	65.4	○	S K 21	S K 21
11	スクレイパー	安山岩	7.2	6.4	1.5	101.9	○	S I 1	S I 1-116
12	石 核	安山岩	6.0	5.2	4.8	169.2		S B 4	L10-P 1
13	砥 石	砂 岩	6.8	5.9	2.9	137	○		

第5章 その他の遺構と遺物

1 おとし穴 (図24)

動物のおとし穴と推定されている方形土坑が1基検出されている。

(1) SK1

D-7区にある。長径98cm、短径67cmの楕円に近い隅丸長方形プランで、深さは162cmを測る。壁面は、南側が垂直、その他の壁面も急斜に掘り込まれている。坑底は長径70cm、短径40cmの隅丸長方形で、底面は平坦であり特別な施設は認められない。埋土は黒色土が均一に入っていた。出土遺物はない。

2 溝状土坑 (図24)

溝状土坑は、調査地内において計9基が検出されている。これらの溝状土坑は「Tビット」「溝状ビット」などとも呼称されているものである。各遺構内よりの出土遺物は全くなかった。

(1) SK8

H-8区にあり、中央部をSK7に切られる。長径390cm、短径24~32cmで南北方向にのびる。深さ62~72cm。埋土は通常の黒色土のみでなく上層は黒色土、中間層に地山の黄色粘質土と淡褐色粘質土がはさまり、最下層が黒色土となっている。北より中央部を排水用ビニールパイプが通っている。

(2) SK9

J7・8区にある。北端は道路によって切られている。長径216cm以上、短径10~22cm、深さは南端で46cmを測る。

(3) SK10

J-9区にある。長径240cm、短径14cm、深さは南端で70cm。

(4) SK13

L-7区にある。長径285cm、短径20~24cm、深さ60~72cm。東端近くを小ビットに切られる。

(5) SK14

L・M-10区にある。長径276cm、短径14cm、深さは東南端25cm、西北端56cmを測る。

(6) SK15

K・L-11・12区にある。長径301cm、短径15cm、深さ39cm。

(7) SK18

J-6区にある。北端は道路に切れ、南端は調査区外にのびるため長径は不明。短径12~22cm。深さは中央部で58cmを測る。

(8) SK19

J-5区にあり、中央部をビットに切られる。北端は道路に切られている。長径195cm以上、短径13~16cm、深さは南端部で62cm。

(9) SK22

G-3区にある。北端が調査区外へのびるため長径は不明。短径13cm、深さは中央部で52cmを測る。

10 小 結

これらの溝状土坑の検出位置は長峰丘頂で東へ開く沢の頂部にあたる。

分布をみるとSK19・18・9・10の4基が丘陵尾根線に沿い、主軸を等高線に平行して、約6mの間隔

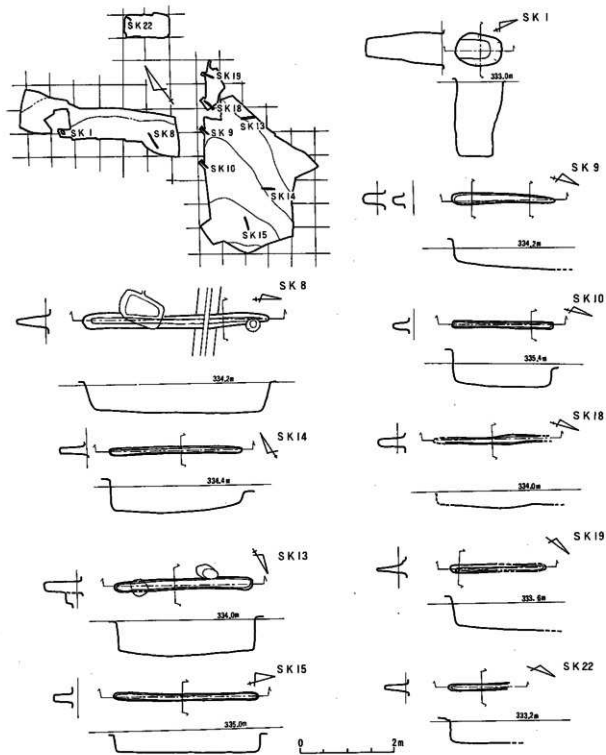


图24 溝状土坑 1:80

を置いて並列している。またSK13・14・15は、東へ開く沢方向へ放射する状態で弧を描き、8.5m～13.5mの間隔で位置するようにも見える。

規模は、弧状に並ぶSK13・14・15が長径276～301cm、短径14～24cmと、それぞれがほぼ同様な大きさであり、また並列するSK19・18・9・10についても、長径の不明なものもあるが長径230cm前後、短径10～22cmとやはりほぼ同じ大きさであると思われる。SK8だけは他と比べて大きい。

同じような土坑は1977(昭和52)年調査(小林・児玉1978)においても3基検出されている(図8参照)。

これらの溝状土坑の年代については、出土遺物がなくよくわからないが、他の例から一応、縄文時代のもので考えておく。

3 その他の土坑 (図25)

その他の土坑として、江戸時代の墓塚と思われる銭貨・鉄製品出土の土坑SK3と、それに準ずる土坑SK2・4・5・6・7の5基、計6基の土坑が、E～H・7・8区で検出されている。ここは丘陵頂平坦部の中央にあたる。

(1) SK3

F・7区にある。長径73cm、短径63cmの円形に近い楕円形のプランである。深さは南側のふちから54cm。出土遺物は、坑底より23～28cm上へ浮いたところの、黒色土層の最下部から寛永通宝と鉄製品が各1点ずつ出土している(図26)。

寛永通宝は、ふちの一部と内側を小さく欠いている他は破損腐食も少なく、文字ははっきり読み取ることができる。直径2.4cm、円中央の正方形の孔は一辺0.6cm、重さ1.8g。

鉄製品は、板状長方形の刃物の半身と思われる。刃先部が無いので長さは明らかでないが、12・13cm前後と推定される。幅2.2cm、背の厚さ0.2cm、重さ20.7g。基部中央に直径約0.1cmの小孔がある。さびが全面に付着する。

SK3は、銭貨と刃物の出土から墓塚と考えられる。

(2) SK2

E・F・8区にある。長径68cm、短径58cmの円形に近い楕円形プランである。深さは8～10cmを測り、坑底は平坦である。出土遺物はない。

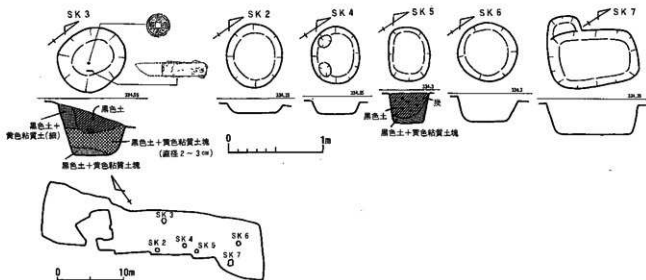


図25 土坑実測図 1:40

(3) SK 4

F-7・8区にある。長径60cm、短径50cmの楕円形プランである。深さは13~15cm。坑底は平坦だが、直径13cm程度のあさい小穴が2つある。出土遺物はない。

(4) SK 5

G-8区にある。直径56cm、短径44cmの隅丸長方形プランで、深さは41cmを測る。上層の黒色土から炭の小片が分散して検出している。坑底は平坦である。出土遺物はない。

(5) SK 6

H-7区にある。直径62cmの円形プランで、深さ22~26cm。坑底は平坦である。出土遺物はない。

(6) SK 7

H-8区にあり、溝状坑SK 8を切る。直径93cm、短径60cmの隅丸長方形プランであり、深さ32cm。坑底は平坦。他とくらべると、大きい。

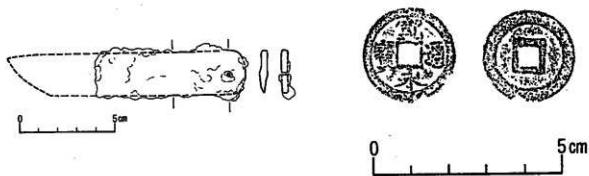


図26 SK 3 出土遺物 1:2, 1:1

第6章 結 語

飯山盆地北半を2分する長峰丘陵北端の照里地域は、往時より弥生時代の遺跡として知られていた。「信濃史料」の地名表によれば、光明寺前遺跡として記載されている。その後、飯山南高等学校照丘分校がこの地に設置され、校地内から数多くの弥生時代の遺物が出土したことから何時とはなしに私達の間で照丘遺跡とよぶようになった。遺跡の範囲については、長峰丘陵北端に所在する光明寺から飯山市立第三中学校敷地までの地域である。

昭和36年、飯山南高等学校校定時制の太田・常盤・外棟3分校が統合され、新たに照丘分校として出発することとなった。新校舎建設地が、光明寺前遺跡として知られていた長峰丘陵の北端部に決定した。昭和35年より校舎建設地の地均し工事が始まり、工事中に若干の弥生土器破片が出土したとされている。昭和37年4月照丘分校に赴任した筆者は、折に触れて付近を踏査し、遺物の採集に努めた。筆者が赴任した当初は、校舎前は樹木が伐採されたままで丘陵の面影はそのまま残されていた。赴任して間もなく校舎南面のグランド整地作業が始まった。ブルドーザーの整地の合間をみて遺物採集の日々がはじまった。ブルドーザーによる破壊はすさまじく、遺物採集が精一杯で遺構の発見など到底不可能であった。同年8月丘陵頂部付近に工業コース実習室建設のための整地作業が行われることとなった。そこで急拠、湮滅しようとする遺跡の一部でも確認しようと神田五六、桐原健両氏指導のもとに調査を実施した。調査地点が、二次堆積と思われる所であり、遺構の発見は出来なかったが、弥生中期土器片を多量に得ることができた。昭和38年頃、現グランドの北東隅に生徒飲用水の溜井戸掘り作業が、教職員の手で行われた。その折、径1m、深さ1m位の円形状土塚が発見された。土塚の側壁には、矢板が整然とめぐらされ、内部からドングリ、クルミ等の炭化物が出土した。明らかに貯蔵穴であった。同年工業コース実習室東側の整地作業が行われた。その折、明らかに住居址と思われる遺構や柱穴がいくつか発見された。そして、住居址内の柱穴と思われる付近で榎殻の炭化物が採集された。その後、昭和52年7月小林幹男、見玉卓文氏等によりグランド南端で調査が行われた。

さて、今回の調査は、飯山照丘高校プールと小体育館建設に伴うものであることはすでに触れたが、調査地点は工業コース実習室建設のために削平された場所であり、全くの手つかずの場所は丘陵部より東側に傾斜を示す沢状の部分だけであった。従って、遺構が検出できるか否かが危惧されたが、結果的には弥生中期後半から後期初頭の住居址6棟、掘立柱建物址4棟が発見された。しかし、これらの遺構も一部を除いては、破壊、攪乱をうけていた。従って出土遺物も住居址検出の割にはきわめて僅少であった。出土土器は、弥生中期の土器が大部分であり、飯山地方弥生中期土器研究に貴重な資料である。仮に何回かにわたる破壊を受けなかったならば、相当貴重な遺物が出土したかも知れない。そう考えると照丘分校建設の折に基本的な発掘調査が行われなかったことが、かえすがえすも残念である。当時の情勢や埋蔵文化財に対する人びとの認識が、今一步であったにしても、もっと埋蔵文化財に対して積極的に対応できなかった筆者の責任は大きい。たとえば、貯蔵穴出土の折の対応、榎殻の炭化物が出土した際の対応。今考えると、何故もっと積極的に学校当局や市教育委員会に働きかけをしなかったのだろうかとか悔やまれてならない。考古学を学ぶ者の一人として恥ずかしい限りである。一度失われた埋蔵文化財は、再び戻ってはこない。こんなあたり前のことを今回の調査を通じて改めて認識した次第である。

最近、飯山地方でも大規模な発掘調査が行われるようになった。新しい発見も枚挙に遑がない。しかし、発掘調査は同時に破壊行為であるということを忘れないようにしたいと思う。飯山地方の最近の調査から、弥生時代の遺跡を改めて眺めてみると小泉遺跡、上野遺跡があげられる。小泉遺跡は、木棺墓群をはじめ

として弥生中・後期の住居址が多数発見され、当地方の弥生文化究明に重要な資料を数多く提供している。上野遺跡は、千曲川辺りの遺跡として、重要な位置を占めている。そして、尾崎遺跡、法寺遺跡、堀ノ内遺跡、小境押出遺跡、柳沢遺跡、東長峰遺跡、西長峰遺跡、岡峰遺跡、鍛冶田遺跡等、外様平を挟んで、関田山脈の東麓、長峰丘陵上に数多くの遺跡が存在する。これらの遺跡は、比較的規模も大きく弥生時代のムラと考えてよいであろう。これらのムラがどのような構造をもっていたのか。そして、これらのムラの中でどこが中心的な役割を果たしていたのか。そして、これらのムラがそれぞれどのように関連し合っ
て存在したのだろうか。今後の重要な研究課題といえるだろう。勿論、そのためには、土器研究を通して、遺跡の年代的同時性を認定する基本的な作業が必要であることは、いうまでもないことである。このような弥生時代の集落研究に照丘遺跡の果たす得割が、きわめて重要であることはいうまでもないことである。

終りに、いちいちお名前は記さなくても本調査にご指導・ご協力を賜った皆さまに対して厚くお礼申し上げます。

PLATE



遺跡遠景（鷹落山サテライトより）1986.5



遺跡全景（南から）



発掘に先立ち樹木の伐採



重機による表土除去



表土除去後の調査地(南から)



I区調査風景（西から）



II区調査風景（南から）



II区完掘状態（北から）



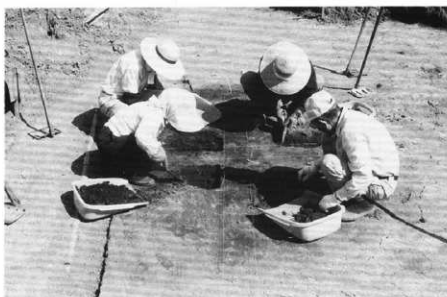
III区完掘状態（北から）



調査開始式



S11 遺構上面



S11 調査風景



SI1遺物分布状態



SI1遺物取り上げ準備



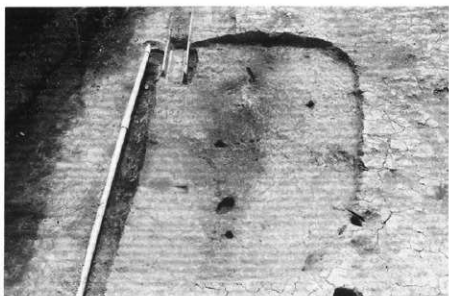
SI1帯部分の遺物状況



S11 土器出土状態



S11 紡錘車出土状態



S11 完掘状態



S12 調査風景



S12 完掘状態



S13 完掘状態



S I 4 完掘状態



S I 5 完掘状態



S I 5 P 1 土器出土状態



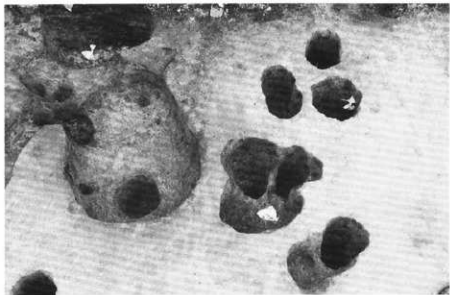
SI 6上面調査風景



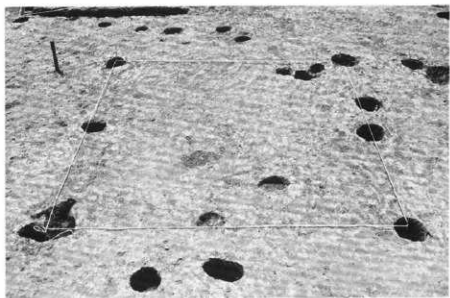
SI 6遺構検出状態



SI 6柱穴群



S I 6の中のSK21



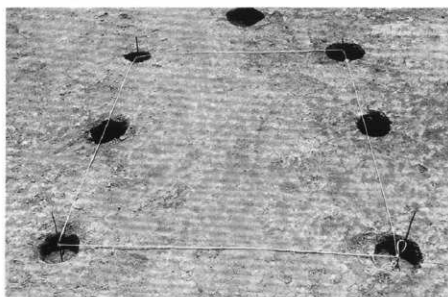
SB1



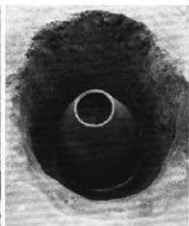
SB2



SB2-P1 土器出土状態



SB3



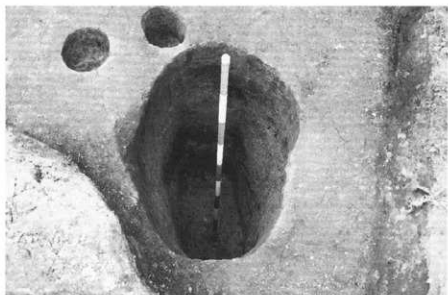
J8-P1 土器出土状態



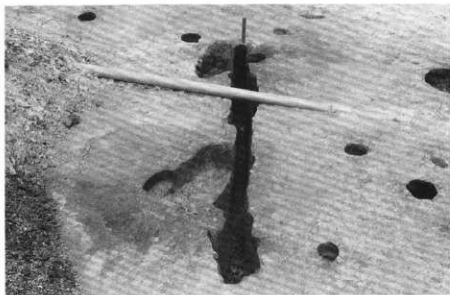
SK1 調査風景



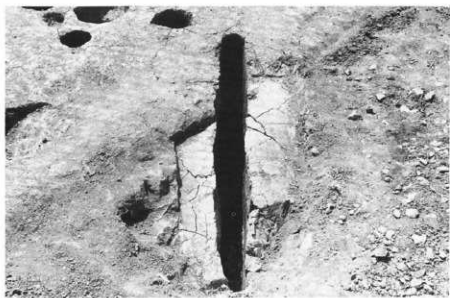
SK1 調査風景



SK1 完掘状態



SK 8



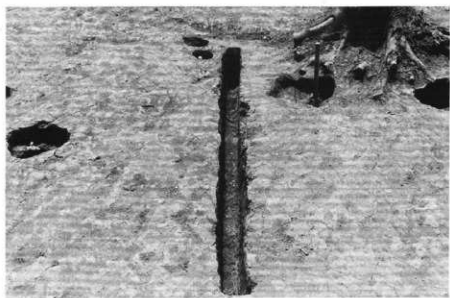
SK 10



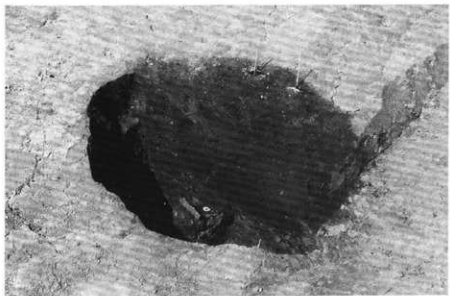
SK 13



SK 14



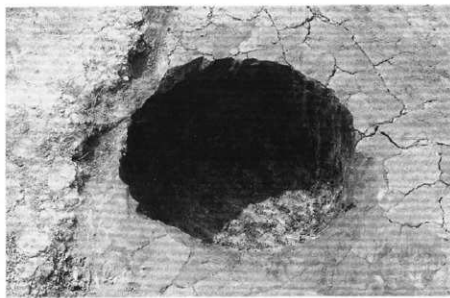
SK 15



SK 3 錢貨, 鉄製品出土状態



SK 3



SK 5



KL-12柱穴群



M-9 柱穴群



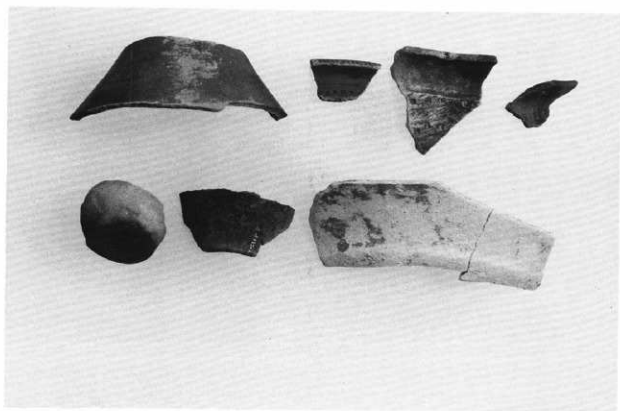
KL-10, 11 柱穴群



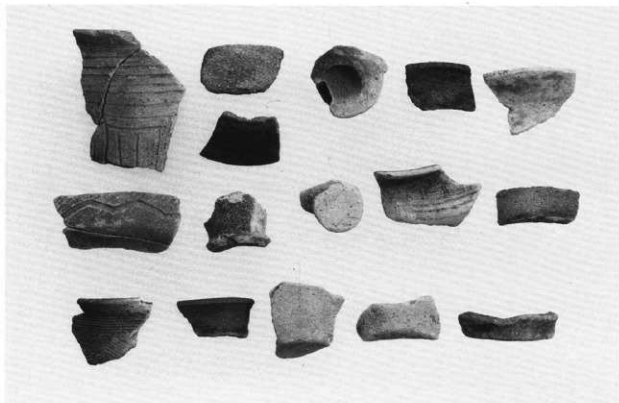
平板測量風景



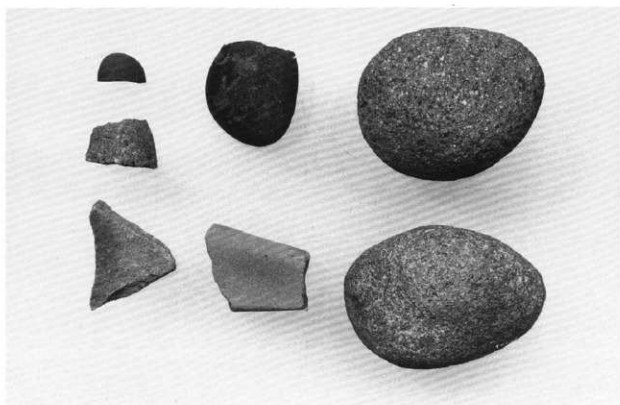
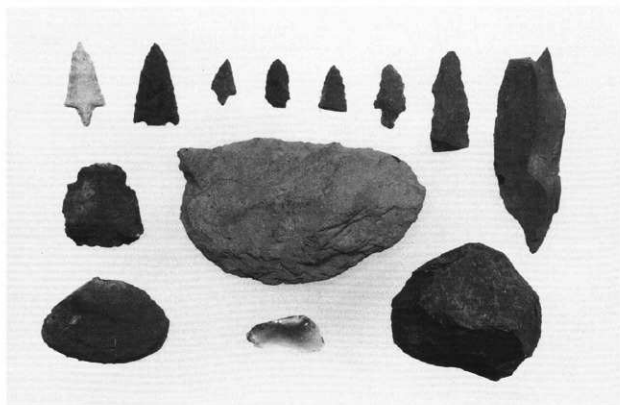
弥生時代の土器



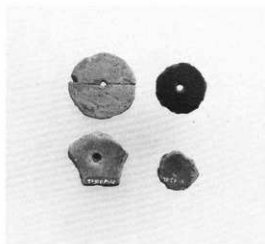
弥生時代の土器



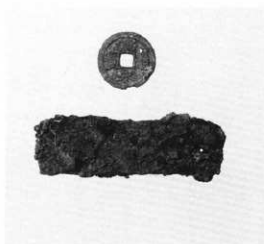
弥生時代の土器



弥生時代の石器



紡 錘 車



江戸時代の銭貨・鉄製品

飯山市埋蔵文化財調査報告 第34集

照丘遺跡Ⅲ

平成5年8月2日 発行

発行者 飯山市大字飯山1110-1

飯山市教育委員会

編集者 照丘遺跡発掘調査団 (団長 高橋桂)

